**「」の表記を考える**

**（補訂版）**

HP：「日本語の起源」

　　　　[http://ichhan.sakura.ne.jp](http://ichhan.sakura.ne.jp/)

　　　　　　　　　　　　前回の更新：～/japanese/japanese2xhp.docx

　　　　　　　　　　　 今回の更新：～/japanese/japanese2hp.docx

　　　　　　　メール：ichhanh@ichhan.sakura.ne.jp

**目次**

1. はじめに（暫定版）/はじめに（補訂版） p3/p3
2. 「」の表記を考える　　　　　　　 p3
3. 「」は唐音なのか　　　　　　　　　　　 p5
4. 中国語の入声韻尾弱化について　 p9
5. フ入声とはなにか　　 p10
6. 唇内入声字はどのように変化したのか p14
7. 促音について考える p17
8. ふたたび「」の表記を考える p20
9. 声門閉鎖音と促音の似かよりを考える p25
10. 『日葡辞書』『訓民正音』の入声を考える p27
11. 江戸初期の「ツ」の音を考える p30
12. 江戸初期まで舌内入声はtだったのか p35
13. 上古音再構について思うこと p40
14. おわりに（暫定版）/おわりに（補訂版） p45/p46
15. 【注】 p47
16. 【以前の考察】（前々回更新分まで） p63
17. 【引用書など】 p65
18. はじめに（暫定版）

今回は「は唐音なのか」という疑問について考えます。そしてその考察を進めるなかで、中国語の中古入声（舌内入声）がtであるという通説の是非を考えていきたいと思います。

ところで一か月ほど前から「朝鮮版伊路波」の「ワ」の音注が‘uaではなく‘oa（와）であるのはなぜか、との疑問にも考えがでてきました。しかし前回の更新から早くも1年以上たっていて、このまま書き継ぐことは無理なので、今回は注などすべて省略し、暫定版として更新することにしました。

2021.4.7

ichhan

　はじめに（補訂版）

　暫定版として更新して早くも一年近くになりました。「おわりに（補訂版）」に書いたように、この一年次々と興味が移ってしまい、これではとても更新ができないと思いなおしました。これまでは考察の区切りのついたところまでを誤字・脱字など校正し更新してきました。しかし区切りのついたところまでといっているあいだに、次々に考察する問題がわいてきて今回のように更新がままならなくなってきました。そこでこれからは考察の終わったとろまでを適度に校正して更新することにしました。
　そこで今回は前回の更新（～/japanese/japanese2xhp.docx）の本文を少々手直しをして、前回の更新にのせられなかった本文の注のみを更新することにしました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2022.2.25

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ichhan

1. 「」の表記を考える

『日本国語大辞典』が「」を唐宋音注1としていることには大きな問題があります。そこでまず「脚立」の表記の変遷をみることから考察をはじめることにします。

漢字には呉音・漢音などの区別があり、それらの違いは次のようにみられています（沼本　2005：188）。

「日本漢字音には，「呉音」「漢音」「新漢音」「宋音（鎌倉期唐音）」「唐音（江戸期唐音）」という名称によって代表される少なくとも五種類の漢字音が体系的に区別される。例えば「行」（筆者注：梗摂庚韻2等平声ɛŋ/敬韻去声2等ɛŋ）に就いて言えば，呉音「ギャウ」，漢音「カウ」，新漢音「ケイ」，宋音「アン」，唐音「ヘン」の如くである。（略）この層的伝承は日本漢字音の大きな特徴である。この日本の五種類の漢字音は，基本的には借用時期の異なりに対応する。即ち，呉音は中国六朝期以前，漢音は唐代中期，新漢音は唐代末期，宋音は宋代，唐音は明・清代の中国語が母胎になったものである。（略）」

そこで「脚立」の「脚」と「立」の単独の読みを次にみてみます（藤堂編　昭和53：1062, 951）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 呉音 | 漢音 | 唐音/慣用音 | 韻母 | 上古音-中古音-中原音韻-北京語（拼音） |
| 腳 | カク | キャク | キャ（唐音） | 薬韻 | kɪak→kɪak→kiau→tšiau（jiăo/jué） |
| 立 | リュウ（リフ） | リツ（慣用音） | 緝韻 | lɪəp→lɪəp→liəi→li（lì） |

＊『音注韻鏡校本』（藤堂・小林　昭和46）より引用。それに見当たらないものは『校正宋本廣韻　附索引』（陳等（重修）　民国80）にみえる当該韻の小韻首字の韻を『音注韻鏡校本』の転写ローマ字でしめした。

＊小韻首字の「腳」は「「脚」の異体字」（藤堂編　昭和53：1068）。

ところで現在の発音をみると、「キヤリツ」（唐音＋慣用音注2；藤堂編　昭和53：1062,951）ではなく、「キャタツ」と重箱読み注3になっています。

このように不思議な読みをする「」ですが、『日本国語大辞典』には次のような記述がみられます（日本大辞典刊行会編　昭和48：6巻67）。

「きゃ-たつ【脚立・脚榻】〘名〙（「脚榻子」の唐宋音よみ）（語釈は省略）　＊尺素往来「凳子（てんす）。脚榻（キャタツ）以下幷卓。机等」　＊史記抄-二・殷本紀第三「脚蹈はとどかず、梯はとり出にも不レ及」　＊日葡辞書「Qiatat（キャタツ）、または、Qiatatçu（キャタツ）。アシツギ（略）　＊浄瑠璃・平家女護島-一「いではからひ申さんと、脚達（キャタツ）をふんでのびあがれば」（以下、現代の「脚立」の例は略）」

　上の記述から「脚立」の表記は時代とともにかわってきたことがわかります。

そこで本家中国語の「脚踏」の語をウェブサイト『百度』でみると、次のような記述がみえます。

「（古代小型家具）

脚踏，今通称“脚蹬子”，古称“脚床”或“踏床”，（以下、略）」

＊https://baike.baidu.com/item/脚踏/9109635。2022.5確認。

　また『中国語大辞典』と『中日大辞典』の記述（ローマ字は拼音）をまとめると、次のようになります。

A.『中国語大辞典　第2巻』（大東文化大学中国語大辞典編纂室編　平成7：1531-3）。一部簡略。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 脚踏（儿・子） | 脚蹬（脚蹬子） | 脚登子 | 脚凳 | 脚鐙 |
| jiăotà（r・zi） | jiăodēng（zi） | jiăodēngzi | jiăodēng | jiăodèng |
| ①踏み台②機足踏み式③方＝‘脚炉’⒔；呉.④足のせ | 機械の足で踏む部分（ペダルの類） | ①足のせ台②踏み台③ペダル | 踏み台 | あぶみ＊「脚鐙子」＝脚登子③ |

　＊「脚塔子」（jiăodāzi）：「〔名〕踏み台.座具の足のせ.」（同書：1532）。

B. 『中日大辞典』（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：707-8）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 脚撘子 | 脚登儿 | 脚登子 | 脚踏板（儿） | 脚踏儿 | 脚踏子 |
| jiăotà（r・zi） | jiăodēngr | jiăodēng・zi | jiăotàbăn（băr） | jiăotàr | jiăotà・zi |
| ①きゃたつ.足ふみ台.②⇒〔脚踏子〕 | ⇒脚踏子 | ①⇒脚踏子②機械の足を承ける敷き台③足をのせるもの（あぶみ、ペダルなど） | ⇒脚蹬板儿 | ⇒脚踏子 | ＝〔脚踏儿〕〔脚登dēng子①〕〔脚登儿〕〔脚搭子②〕机の下の足のせ |

＊「〔脚蹬板儿〕jiăodēngbăr＝〔踏tà板（儿）④〕〔脚踏板儿〕踏み板.ステップ（機械・車などの）」（上書：707）。

＊「きゃたつ【脚立】梯凳tīdèng）」（杉本・牧田・古屋共編　2013：日中辞典の部121）。

＊「じてんしゃ【自転車】自行車zìxíngchē；脚踏車jiăotàchē；单車dānchē」（同書：227）。

1. 「」は唐音なのか

前節では「キャタツ」に関係する日本語の各時代の表記と現代中国語の表記をみてきました。ところで指小語の「子」は「唐代にはこの「子」が指小性を持たぬ「宅子」（『黙記』），「車子」（『旧唐書』回鶻伝），（略）などにもつきはじめる。」（志村　昭和42：267）ので、中世の宋・元代には「脚踏」に「子」のついた「脚踏子」が存在したと考えられるでしょう。

そこで「脚立」にたいする、中国語と日本語の関係を概略、次のように考えてみます。

隋以前　～　唐 　　 宋・元 　　　　　　　　　　 　 　現代

中国語：脚蹈-----→脚踏-------→脚踏子-----------------------------→脚踏子

（借入）　↓　　　　↓　　　　　↓

日本語：脚蹈 　 脚踏　　　　 脚榻子? 　　　脚榻　　　 脚達　　　　脚立

 カクダウ　キヤクタフ　 キヤ・タ・ツ　 キヤタツ　 キヤタツ　　キャタツ

 kɪakdəu　　kɪakthəp　 kɪatatsiei　　*Qiatatçu*　 *Qiatatçu*　　*kyatatsu*

呉音 　 漢音　　　　宋音 　　　　唐音　　　 江戸中期　　現在

＊「脚踏子」の「子」（中古音止韻tsiei）の韻母については注4。
＊宋音の『脚榻子』には疑問符をつけてあります。
＊呉音・漢音・宋音はとりあえず上のようにローマ字化してあります。入声弱化については次節。

＊『日葡辞書』に「Qiatat. l,Qiatatçu.　キャタ**ッ**.または，キャタツ（脚榻）　Axitsugui.（足継）（略）」（土井・森田・長南編訳　1980：492）とあり、いまかりに（江戸期）唐音を「脚榻」（*Qiatatçu*）としてあります。*kyatatsu*はヘボン式ローマ字。

ところで現代中国語の辞典に「脚踏子」はみられますが、「脚榻子」はみられません。また『日葡辞書』には「脚榻」がみえるので、禅僧は「脚榻」を日本に持ち帰ったのでしょうか。それとも現代中国語にみられない「脚榻子」を日本に持ち帰ったのでしょうか。大いに疑問になります。
　ところで、有坂氏は『日葡辞書』に「脚榻」と記載されていることから、次のような考えをだされています（有坂　昭和32：565-6）。

「（上略）室町時代の辭書類に見える唐音語の中で「子」の字は椅子（イス）帽子（モウス）拂子（ホツス）段子（ドンス）桶子（ツス）などのやうに一般にはスと讀まれてゐるのであるが注5、唯二つの例外がある。即ち、楪子（チヤツ）と脚踏子（キヤタツ）とがこれである。前者は、橋本先生が吉野時代又は室町初期の撰と論定しておいでになる頓要集の中に存するものであり、後者は文安元年（一四四四）の序のある下學集に既に見えるものである。慶長八年（一六〇三）出版の日葡辭典を譯したLéon Pagésの日佛辭典（一八六八）には、前者をTchatsouと記し、後者をKiatat,ou kiatatsouと記してゐる。一体「子」の支那原音はtsɿなのであるから、日本語のツがtsuの音を持つてゐる時代ならば、「子」の支那音は當然ツで模倣せらるべき筈である。故に、江戸時代に借入された毯子の如きはダンの音になつてゐる。然るに椅子（イス）帽子（モウス）等の如く、古人がかつて之をスの形で傳へたといふことは、即ちその當時日本語のツが未だtuに近い狀態に在つたことを示すものでなければならない。併し、さらば楪子（チヤツ）脚踏子（キヤタツ）の借入された時代には日本語のツは既にtsuになつてゐたものと考へなければならないか、といふと、必ずしもさうではない。何故なら、ツが未だtuの状態に在つた時代には、日本人の耳には、支那音節tsɿは、言はばス（su）とツ（tu）との中間音のやうに聞えた筈であるから、それはスで模倣されることもあつたらうが、時にはツで模倣されることが無かつたとも斷言は出來ないわけである。殊に、楪子や脚踏子の場合には、「楪」や「踏」が入聲（恐らくは韻尾に聲門閉鎖音を有するもの）である關係から、その直後に續くtsɿ（子）のtが常よりもいくらか硬く響いたといふ風なことは、有り得ないことではない（音聲學協會會報41号，本書607頁参照）。」

＊この有坂氏の考えをAとします。

このように有坂氏は考えられたのですが、上の考えには納得されなかったとみえ、後記のなかで次のように述べられています（有坂　昭和32：683-4）。

「（上略）ただ、ここに注意すべき點がある。即ち、チヤツは、なるほど下學集・節用集・撮壤集・運歩色葉集などには楪子と書いてあるけれども、更に古い頓要集では楪の一字をチヤツと讀んでゐるし、なほ溫故知新書も同樣である。又、キヤタツは、支那では脚踏子とも言ふけれど、我が國では、古來脚踏又は脚榻（榻は踏と同じ）とのみ書いてゐて、「子」の字は着けない。然らば、チヤツやキヤタツのツは、「子」の音ではなくて、寧ろ、「楪」や「踏」（「榻」）の原音の入聲短促の勢を表し、或は、原音の韻尾に存在したと思はれる聲門閉鎖の音を寫したものであるかも知れない。我が國の禪林では、儈の持つ鉢を楪と言ひ、此の場合には楪をテツと讀む。禪宗語にはなほアン（合行）アン（行益）のやうな例もある。チヤツやキヤタツのツも、或はこれらと同じ類に屬するものではなからうか。この考は、一つの試案として提出しておく。（略）なほ、楪子はや禪林象器箋ではチヤ（ツ）スと讀まれてゐる。もしチャツが「楪」一字の音であるとすれば、この方が本當の（「子」の着いた）「楪子」の唐音であるかもしれない。」

＊この有坂氏の考えをB とします。

そこで有坂氏の先の考え（A）と上の考え（B）を比較すると、次のようになるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 有坂氏の考え（Ａ） | 有坂氏の考え（Ｂ） |
| 当時の音 | 1.「子」はtsɿ、当時のツはいまだtuだった2.「踏・楪」（唇内入声）の韻尾が[ʔ]だった | 1.鎌倉時代のスは江戸時代にはツ2.「～子」は短促の勢/[ʔ]（下注） |
| 脚踏（＝脚榻） | キヤタ・ツ（脚踏・子） | キヤ・タツ（脚・踏） |
| 楪子 | チヤ・ツ（楪・子） | チヤツ・ス（楪・子）/チヤツ（楪） |
| 唐音 | 脚踏子/楪子 | 脚踏/楪（子） |

＊下注：「或は、原音の韻尾に存在したと思はれる聲門閉鎖の音（筆者注：[ʔ]）を寫したものであるかも知れない。」（有坂　昭和32：684）。

上の比較からＡとＢの考えの主な違いは「キヤタツ」「チヤツ」の語尾のツを接尾辞の「子」とみるか、それとも声門閉鎖音（/ʔ/）とみるかであるといえるでしょう。

そこで上のＡとＢの考えのどちらが正しいかを考えるために、室町・江戸時代の「キヤタツ・チヤツ」の表記をみてみると、次のようになっています。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 書名 | 下学集 |  | 撮壤集 | 温故知新書 | 運歩色葉集 | 書言字考 | 禪林象器箋 |
| 著者 | 東麓破衲序 | 僧某（未詳） | 飯尾永祥 | 大伴広公 | 不明 | 槙島昭武 | 無著道忠 |
| 刊行年 | 1444年 | 1532年成 | 1454年序 | 1484年  | 1548年序 | 1698年成 | 1741年 |
| 引用書 | 東大國語研究室編　昭和63 | 浜田・佐竹　昭和46 | 中田・根上　昭和46 | 中田・小林 | 無著道忠 |
| 脚蹈 | 脚蹈・脚蹈・榻 | 項目なし | 脚蹈 | 脚榻 | 脚蹈 | 脚榻 | 脚踏 |
| かな | －ヤ・タツ/キヤ・タツ/シヂ | 表記なし | キヤ・タツ | キヤ・タツ | キヤ・タツ | キヤ・タツ |
| 引用頁 | 82,235,391 | － | 62左3 | 391右1 | 278右8 | 昭和48：334右1 | 明治42：812 |
| 楪 | 楪子 | 楪子 | 楪子 | 楪 | 楪子 | 楪子 | 楪子 |
| かな | チヤツ・ス/チヤ・ツ/チヤ・ツ | チヤス/チヤツ/チヤツ | チヤウ□ | チヤツ（楪） | チヤ・ツ | チヤ・ツ | チヤツ・ス |
| 引用頁 | 79,231,389 | 218上,218上,218上 | 63左3 | 431右1 | 154左1 | 昭和48：308左8 | 明治42：827 |
|  | 注6 | 注7 | 注8 | － | － | 注9 | 注10 |

＊上記のかなの中黒（・）は筆者補。

＊『下學集三種』：「シヂ」は「脚蹈」ではなく、「榻」にたいする仮名。

＊『塵添壒嚢鈔』（10巻43段）の「四十三　ノ事（略）△ト云〇字は何ソ（以下、略）」（同書：218）。

＊『撮壤集』：「楪子」の項目には「」のみ「チヤウ」の仮名があり、「子」には仮名がなく、上のように表示。

＊『書言字考』：「合類大節用集」（延宝8：1680年刊）とは別書。

＊『禅林象器箋』：国会図書館デジタルコレクションinfo:ndljp/pid/823268より（2022.2.5確認済）。

＊『頓要集』などその他の著作は注11。

さて上に引用した諸文献からわかるように「脚榻」の表記はみられても「脚榻子」はみられません。そこで鎌倉時代、禅僧が日本に持ち帰った宋音は「脚榻子」ではなく「脚榻」だったと考えられてきます。そこで「脚榻子」を現代の学者が考えだした幽霊語であると考えても（「脚踏」と「脚榻」のちがいはいま不問（第8節参照）にして）、鎌倉時代の借用語「脚榻」の「榻」（透母盍韻thap：タフ）がタツに読まれたのはなぜか、また江戸時代に「」から再び「」（「」は定母曷韻入声dat）に表記が変わったのはなぜかという、新しい疑問がわいてくるでしょう。

1. 中国語の入声韻尾弱化について

ここからは唇内入声字の「榻」「トウ（タフ）」（藤堂編　昭和53：665）が舌内入声字（例：「」）と同じようにその語尾が「ツ」で表記されるようになったのはなぜかという問題を考えることにします。

「円仁をはじめ、唐末に入唐した求法僧らによって伝えられた9世紀初頭以降の唐代長安音」(中国語学研究會編　昭和45：121) の新漢音注12には、次のような特徴がみられます（沼本　2005：196-7）。

「1.鼻子音の消失がより進行する。「明ベイ」「命ベイ」「愍ビン」「寧デイ」

2.喉内撥音韻尾の口蓋化がより進行し,脱落した形が有る。「證シ」「乗シ」「勝シ」注13

3.入声韻尾の消滅過程を反映した形が有る。「積シイ」「十シ」「白ハイ」

また上の第3項の特徴である入声韻尾消失については、次のような考えがあります（藤堂　1980：173）。

「また極キ・薩サのように，入声韻尾のきえた形を反映しているのもおもしろい。北宋の時代に, 入声韻尾の/-p/, /-t/, /-k/などが区別されなくなって, みな一様に/-・/（筆者注：声門閉鎖音/ʔ/）という促音になった。新漢音の読み方は，おそらくこのような状態を反映するものであろう。」

ところで有坂氏は羅常培氏の考えを紹介するなかで、次のような考えを述べられています（有坂　昭和32：601－2）。

「（上略）まづ、上古音p,t,kは、廣州・客家・汕頭・厦門等の方言ではそのまま保存せられ、呉方言では聲門閉鎖音に變じてゐる。然るに、或る方言では、中古に於てこのp,t,kがb,d,gに變じ、更にβ,δ（r）,~~ɡ~~と弱まり、つひには全く消失するに至つた。官話や西北方言は即ち後者に屬するものである（「唐五代西北方音」注1468頁）と。この（筆者注：羅常培氏の）考に據ると、北京官話の如きは、未だかつて聲門閉鎖音の状態を經過したことが無いといふことになる。従つて、前の滿田博士のお説注15とは相容れないのである。（中略）のみならず、官話の中でさへも、南京官話は入聲の韻尾にはやはり聲門閉鎖音を持つてゐる。これらの状態から考へて見ると、同じ系統に屬する北京官話の如きも、古くはやはり入聲韻尾には聲門閉鎖音を持つてゐたものであり、それが後世消失した結果今の形になつたものである、と考へるのが一層穏やかなやうである。」

＊δ：英語のthisのthの発音記号（犭偏の左払い（*J*）を上から2番目のノにつなげ丸めたもの）の代用。

そこで中国語北方方言の入声の変化にたいして諸説注16あるなか、橋本氏は次のような考えがあると紹介されています（橋本萬太郎　1981：327）。

CVp┓

CVt┻━CVt━┓

CVk ＞ CVk━┻CVʔ＞CV」

＊南方方言はp,t,k→p,t,k（変化なし）。

そこで宋時代の（江南の）官話系方言の入声は韻尾が弱化し声門閉鎖音（[ʔ]）になっていて、渡海した禅僧たちはその音を聞き覚え持ち帰ってきたと考えることができるでしょう。そして中国から帰った禅僧たちは中国で聞き覚えた声門閉鎖音（/ʔ/）が当時の日本語のツに似ていたために（第8節：濱田氏の考え）、その声門閉鎖音をツで表記したと考えることができるでしょう。

この考えをわかりやすく表わすせば、次のようになります。

隋唐　　宋　　　　　 　 現在

中国語北方方言の唇内入声韻尾　：p------→ʔ------------→φ（消失）

 　　　　　　　　　↓　　　↓（弱化した声門閉鎖音を禅僧が持ち帰る）

日本語の唇内入声語尾（促音ツ）：↓　　 ツ------------→ッ（Q）

　　　　　　　　　　　（ウ音化） ：フ--------------------→ウなど（この変化は次節）

 　　　　　　　　　　　　　上代　　鎌倉時代　　 　現在

1. フ入声とはなにか

前節では宋代の中国語入声は弱化した声門閉鎖音（/ʔ/）になっていて、禅僧が持ち帰ったその声門閉鎖音は当時の日本語のツに似ていたために「榻」が「タツ」と表記されたと考えました。しかしこの入声の声門閉鎖音がツに似ていたために「榻」（透母盍韻thap）が「タツ」に読まれたという考えは本当に正しいのでしょうか。

そこで唇内入声字のかな表記の変化を考えるために、次に『』（元禄版）注17の声点図をみてみます（上野編　平成28：62）。

上聲　 　毘富羅注18　去聲

〇　　　〇　　　〇

平聲輕〇 　**國**〇入聲輕

　 　 〇　　　〇 　　〇

平聲　 　入聲フ注19　入聲ツクチキ

＊図中の‘上聲’などの縦書き文字は横書きに改めました。

ところで『法華経音弁訛』（沙門覚順撰1844年刊）には「法」字について、次のような記述がみられます（小松　1956：70）。

「　法華ト二字ノトキハホッケ〇法華経ト三字ノトキハホケキョウ〇妙法ノトキハメウホウ也、法字ニ三音ヨム」

＊新漢音の例：「入平佛入平法入佛入（阿彌陀經）」（飯田　1990：91）。入声点・平声点の小点（・）は入/平で代用。

このように「」のときは促音に、「」のときは入声語尾が消失して、また「」の時は入声語尾フがウに変化して読まれたことがわかります。ます。

そこで沼本氏は「」の読みと先の『補忘記』にみられる入声フとを関係づける、次のような考えをだされました（沼本　1974：1）。

「鎌倉時代（筆者注：1185－1333年）初期書写と思われる「九条家本法華経音」は、その内容から察せられる如く、法華経呉音直読の為に編述されたものと考えられる。この音義の巻末部（覆製本二十一丁表～同裏）に、声点図の掲げられている事はよく知られた所である。その声点図の平声重と入声重との中間に加える声点として、

本入声ナルヲ平声呼フ　妙法　小劫　三業

の如き書入れが有る。この声点が、後世「フ入声」或いは「不入声」と呼ばれるものと同一のものを指している事は疑い得ない。」

＊上の平声重・入声重・「中間に加える声点」はそれぞれ先の『補忘記』の声点図の平聲・入聲（ツクチキ）・入聲（フ）にあたる。

また上の「九条家本法華経音」と同時代の親鸞の『草稿本教行信証』（1224年成）にもウに変化した「フ入声」がみられ、それにたいして小林氏は次のように述べられています（小林　昭和44：59）。

「《不入声》　唇内入声音を「－フ」でなく「ウ」で表記することは、和語におけるハ行転呼音と関係するが、それだけでなくこの入声音が、韻尾に[u]を加えた開音節化したものであつたことを考えさせる。草稿本教行信証では、

　　〇〇師（巻五）　ママ〇塔タウ寺（巻五）

と葉韻の「猟」、盍韻の「塔」を「レウ」「タウ」と「ウ」で表記し、しかもこの入声字に、平声点が差されている。これは入声音が本来の漢字音を失い、[u]を加えた音になった結果、効摂平声所属の[u]に由来する（筆者注：豪韻auなどの）字音と区別がつかなくなつた反映である。九条家本法華経音に「本入声ナルヲ平声呼フ　妙法　小劫　三業」とあるのは、この現象が院政期から存したことを示している。（以下、注20につづく）」

＊不入声がウに変化することにハ行転呼音の変化が関係しているとみることにたいする沼本氏の批判は次節。

そこで博士家訓点資料にみえる唇内入声字の表記を考察された小松氏は上のフ入声のウ音化にたいして、次のように考えられました注21（小松　1956：67）。

「**概要**（改行）中国の中古音において、韻尾に-Pを持っていた唇内入声韻所属の諸字は、最初フのかなを以って転写されたが、以後、第二音節以下に「フ」を持つ国語の語彙と同様の音韻変化の結果、韻尾が長音化して、本来の無尾韻や-ŋ韻尾を持つ諸字と区別を失うに至った。しかしこの一般的傾向に反して、一部には、立・雑・接注22・摂・執・湿・蟄颯23などのように、舌内入声音と同一の「ツ」韻尾に変化してしまった文字がある。（筆者補：濱田氏による）この現象に対する説明としては、中国本土における入声韻尾の崩壊過程と関係づけてなされた（下線は筆者）ものがあるが、ここには、伝統的性格の特に強いと思われる博士家訓点資料にあらわれた読書音において、この種の特殊な変化をした文字が、

a、一字の漢語として、サ変動詞の語幹になる場合が極めて多いこと。（接・接ママ・揖等）

b、使用の範囲が、無声子音に続く場合に殆んど限定されていること。（颯等）

によって、中世初期から

-Φu-＞-Φụ-＞（-Φ-）＞-q-

の過程で促音化をおこし、舌内入声韻尾と促音とがたまたま同じ「ツ」表記をとることから、舌内入声と誤認されて-tの韻尾を持つに至った過程を明らかにして、この変化が、新来の宋音とは一応無関係に起こった、国語自体の音韻変化注24であることを立証し、あわせて、日本字音における異例の考察に当っては、音韻法則を優先させる前に各字の語性上の差異についての十分な考慮が払われなければならぬことを強調しようとする。」

＊ụ：uの無声化音（u の下部に小丸点（〇）の代用）。

そして唇内入声pがツ表記されるようになった変化にたいして、小松氏は次のように考えられました（小松　1956：75）。

（1）-p……-＞-Φu-＞-Φụ（-Φ-）＞-q-

（2）-p……-q-―――――――――――――--q-

↘↘

-t―――――――――――――-t＞-tɯ＞-cɯ

　　　　　　∖

　　　　　　　-q-―――――――――――――--q-

＊↘↘印はフ入声が舌内入声のtに誤認されたことを、また∖印は舌内入声のtが促音化（Q：小松氏のq）したことを表わしているとみられます。

＊（1）の変化にハ行転呼音を想定することにたいする沼本氏の批判は次節。

＊（2）の-p/-tの2行は括弧（﹛）でくくられています。

そこで唇内入声字の表記にたいする小松氏の考えを筆者の理解によって図式化すると、次のようになります。

隋～唐代　　　　　　　　　　　　宋代　　　　 　　 現代

中国語の入声　　 ：t（舌内）/p（唇内）--------------→ʔ---------------→φ（消失）

↓入声t/pを借入

舌内入声の促音化：t---→ツ（促音Q）--------------→ツ（Q）---------→ッ（Q）

唇内入声の変化　：p→Φu（フ入声）┬→u（のち長音化）

└Φụ（無声化）→Q（促音ツに誤認）→Q（ッ）

奈良時代　　平安時代　　　　　鎌倉時代　　　　　 現代

＊中国語の入声は宋時代には声門閉鎖音（/ʔ/）に変化していたと考えてあります。

そこで上の変化が正しいとするなら、平安時代終わりころから院政時代あたりのごく短い期間に、Φuが無声化し、さらに舌内入声のQに誤認されるという離れ業の変化がおこったことになります。しかし言語は緩慢に、そして確実に変化するという常識的な（つまり言語学的な）考えからすれば、とてもそのような変化を考えることはできないでしょう。このように考えてくると、小松氏の唇内入声（入声フ）が舌内入声ツに誤認されたという考え（上の図式の変化）には疑問がわいてくるでしょう。

1. 唇内入声字はどのように変化したのか

前節ではフ入声が舌内入声ツに誤認され、ツ表記されたという小松氏の考えにたいして否定的な考えをだしておきました。そこで筆者と同じように小松氏の考え（以下、誤認説とよびます）を批判された沼本氏の考えを、これからみていくことにします。

まず真言声明家の故大山氏（1895－1992）の唇内入声にたいする考えを沼本氏は次のように紹介されています（沼本　1974：1）。

「例えば、「〇妙法」の「法」（筆者注：〇は平声点、下線はフ入声の代用）にしてもしこれを「法〇身〇」（筆者注：入声と去声）と綴るならば「法」は当然入声となりツメル声となる。けれど「妙法」と書いたとき「法身」と「法」と同じ音で読むを得ない。このときの「法」は入声の「法」に対して「不入声」の「法」という。総じて入声は二字仮名において下の文字がフツクチキという仮名字の中の何れかである場合に限る。上の一・崛の如き福・目の如き皆ツチク等の音を下に有するので入声となる。その中「法」はハフの仮名に読む。即ち下にフの音を有するときこれを不（フ）入声という。換言すれば入声でない入声という意である。この入声と不入声とは漢・呉音に通ずる。（以下、略）」

　＊上の引用文は原著（大山　昭和53：367）から再引用しました。

上の大山氏の記述を沼本氏は次のように解釈されました（沼本　1974：2）。

「（略）即ち「法身」を入声であるとし、これに対立するものとして妙法の場合を不入声と呼ぶ、と言うのである。そして、入声はツメて読み、不入声は「ハフ」の仮名に読む、との説明が有る。（略）伝統的な声明の用語としての「ツメル」は、所謂促音を示すと考え得るから、結局入声とは促音で読む場合を言っておられる、と解釈すべきであろう注25。この氏の解釈は、具体的な読誦を踏まえての立言であって、看過出来ない。」

そしてフ入声についての小松氏の考えと声明家である大山氏の考えの違いを沼本氏は次のように述べられています（上書：2-3）。

「（上略）小松英雄氏は、唇内入声字が、の例の中に挙げられていない事を積極的に評価され、平安末期までには全て平声に転じてしまっていた（筆者注：前節で紹介した「九条家本法華経音」にみえる「本入声ナルヲ平声呼フ　妙法　小劫　三業」）――そして、「平声に転じる」という事を、韻尾が＝ウとなっていた――と解釈された。然しながら、大山氏の考え方に従うならば、当然「法身」の「法」等の場合には、入声重の例として挙って来る事になるはずである。」

また法華経読誦資料（⒜：大東急記念文庫蔵法華経巻八（24-120-892））を分析された注26沼本氏はフ入声と入声の違いを次のようにみられました（上書：8）。

「＜唇内入声字が熟語の下位に立って読まれる場合には常にフ入声が加えられる＞＜唇内入声字が熟語の上位に立って読まれる場合には常にフ入声と入声との両方が加えられる。その際、フ入声が加えられるのは下接字が有声子音の場合であり、入声音が加えられるのは下接字が無声子音の場合である。」

＊たとえば現代語では「」（下接字の「言」は有声音）・「」（下接字の「誌」は無声音）/「」（下接字の「法」はウ音化）注27。

さて大山氏が述べられた本来の入声とフ入声（入声でない入声）の違いから、沼本氏は唇内入声字について、次のように考えられました（上書：12）。

「（略）法華経の伝統的な読誦に於ける唇内入声字には、

ツム―ツ表記―入声

ヒク―フ表記―フ入声（入声の格外）

の如き関係が成立していたのである。この「ツム」が促音を示している事は「ツ」で表記してある事に依って明らかであろう。そしてそれを「入声」として把握しているのである。これに対して、「ヒク」音である「フ入声」は全て「フ」で表記されているので、音価も「-ΦU」と考えられそうであるが、そう考えると、音義中の「引テ長声ニ読ム」という記述、亦当時のキリシタン資料の記述の示す実態に合致しないので、既に「-U」となっていたと考えてよい。

従って、右（筆者注：上）の両音義（筆者注：日遠・日相の音義）の記述注28から、

入声―促音/-Q/

フ入声――/-u/

という音価が導き出されるのである。

江戸時代の日遠・日相の両音義から導き出される右（筆者注：上）の結論が、そのまま鎌倉時代の具体的な法華経読誦呉音にも適用し得る事は、両者に共通して見出される文字面の入声・フ入声と、促音（仮名）表記・非促音表記との用例がしている事に依って疑う余地はない。但し鎌倉時代のフ入声の示す音価が、〔-U〕であったかどうかについては即断出来ない。尤も先に例示した様に、南北朝期加点と思われる仮名は全て「―ウ」と表記されているので、この当時には〔-U〕に変化していた事は確かであるが、それとて、全ての場合に敷衍していいものかどうか、尚問題がある。（略）」

ここまで沼本氏の論文（沼本　1974：1－22）から筆者の考察に必要となる部分のみを簡単に紹介しました。

そこで入声に対立するフ入声が特立された事情についての沼本氏の考えを次に紹介しておきます（同書：18）。

「＜フ入声の特立は、（法華経）呉音読誦の際生じた唇内入声の促音化を、唇内入声＝フ・舌内入声＝ツチ・喉内入声＝クキという体系的把握を崩さずに、処理する為に発明されたものであって、ハ行転呼音注29とは無関係である＞

奈良　　　　　　　　　　院政初期頃

-*Φ*U（フ入声特立）＞-U

　　　　　　　　∕

-P＞（-Φ-PU）＞-*Φ*U

∖

-Q………………-Q （入声とす）」

ここで上の沼本氏の考え（上書：15）を筆者の理解によってまとめると、次のようになります。

 　古代　　　　　院政時代前後　　　　　　　　　　現代

ツ表記：p--------┬-→Q（入声:舌内入声tと同認）----→Q（ッ）

ウ表記：　　　　 └-→Φu（フ入声の特立）-----------→u（ウ）

＊小松氏の考えは前節の図表（小松　1956：75）。

ところで沼本氏は法華経読誦の「呉音直読資料に於ける唇内入声字の入声点（筆者注：本来の入声である入声重）は、促音化を反映している」（沼本　1974：11）とみられました。また『日葡辞書』には「」「」（「Nattocu/cattô」；土井・森田・長南編訳　1980：453,110）がみられます。そこで唇内入声と舌内入声の「納」（合韻əp）と「葛」（曷韻at）はともに促音ツ（Q）で発音されたとみられるでしょう。さらにこの促音ツは同時代の日遠・日相の両音義にもみられることから、沼本氏は唇内入声（重）と促音ツ（Q）の関係は自明であり、「疑う余地はない」（前引）と考えられました。しかし、この沼本氏の「疑う余地はない」との言明には大きな問題があります。なぜなら沼本氏は院政～鎌倉時代の入声と現在の入声が同じであったと暗黙に認めて立論されているからです。もし鎌倉時代の入声と大山氏が伝承された入声（ツメルの音）が同じでなかったとすれば、あるいは鎌倉時代の入声と江戸時代の入声が同じであったとして、その江戸時代の入声が現在の促音と同じでなかったとすれば、鎌倉時代の舌内入声に同認された唇内入声と現在の促音ツが同じであったとはただちにいうことはできないでしょう。そこで鎌倉時代の唇内入声のツが現在のツ（促音Q）であると結論づける沼本氏の考えには「疑う余地は大いにある」としなければならないでしょう。

1. 促音について考える

前節ではフ入声ではない、本来の唇内入声（入声重）を現在の促音ツ（Q）とみることに「疑う余地はない」とされた、沼本氏の考えに疑義をだしておきました。

ところで日本語で促音となるのは唇内入声だけではなく、舌内・喉内入声も促音化しますが、そこには次のような違いがみられます（濱田　昭和58：82）。

「（四）現代語において、入声音に清音節が接して一音韻論的単位となる場合、舌内のものは原則として促音の形で現われるが、唇内、喉内のものは必ずしもそうでないこと（「、、、」など、これに対して「、」）などが挙げられる（原注4）。従ってこれ等の資料によって、当時「つ」で表わされた入声韻尾が[t]であったという事実に対しては殆んど疑いを挿む余地はないかに見える。（略）」

そこで唇内・舌内・喉内入声の違いをみると次のようになっています（同書：82）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 唇内入声p | 舌内入声t | 喉内入声k |
| 母音化 | 法科(ホフ/ハフ・カ：フ入声）→ホウカ→ホーカ（長音化） | 仏（ブチ/ブツ：呉音）仏（フツ：漢音） | 学派（ガクハ）識別（シキベツ：曽・梗摂のみ） |
| 促音化 | 法華（ホッケ）＊語彙的（接近：セッキン） | 仏陀（ブッダ）＊連声（雪隠：セッチン） | 学校注30（ガッコウ：カ行音が下接）＊「六反」（ロッペン） |

そして上で濱田氏が指摘されているように、舌内入声は原則として促音の形で現われる注31のですが、喉内入声は次のような特徴がみられます（沼本　1974：16）。

「鎌倉初期以後多出する喉内入声字の「ツ」表記の例を広く検討してみると、明らかに、全てカ行無声子音が下接する場合に限られて出現するという時期が長く続く。カ行子音以外で促音化したと認められる例が広く見出される様になるのは鎌倉中期以後である（原注32）（以下、略）」

ところで喉内入声字のツ表記（促音化）については日遠の弟子である日相（日蓮宗の僧1635～1718年）の音義に、次のような記述がみえます（上書：13）。

「（上略）夫レ他音属自ノ連声ト者下ノ自カ音ニサソハレテ上ノ他ノ音ヲ転スル也郁ウツウク-□モツモク-枳□釈シャシャク-□子ネツ□六ロツロク□各カツカク-等是也郁枳目枳モ仮名ツクル時ハウクキモクキナレトモ（筆者注：トモは合字）ヨム時ハ下ノ字ノ自カ音ニサソハレテ上ノ他字ヲ変メウツキモツキトヨム也（下略）」
　＊読みやすくするために□印を挿入してあります。

上の記述から、沼本氏は喉内入声と唇内入声の促音化の違いを次のように考えられました（上書：13）。

「（略）重要な点は、「」（筆者注：「」は来母屋韻3等lɪuk）の例を除いて、いずれもカ行子音に続く場合の促音化例である事（略）、この促音化を「連声」と把握している事、である。（中略）喉内入声字の促音化を、その様な「連声」として把握した事は、結局喉内入声字の促音化が、単なる孤立的な音声現象にすぎないものと把握されていた事を物語るものであろう。（略）唇内入声字の場合につき「一字ニツムルトヒクトノ二声アルハ、フツ入声ノ字ナリ」との記述（筆者注：先に引用した日相の『法華経音義補闕』の記述）が有る様に、促音化をの範疇で把握していたのとは、大きな相違が有ったわけである注32。」

さてこのような唇内・舌内・喉内入声字の変化は次のように考えることができるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 入声 |  | 古代　　院政初期　鎌倉時代　　　　　　　　　江戸極初期　 現代 |
| 舌内t | 促音化 | set---→seQ-------------------------------→seQ---------→seQ（せっ） |
| 母音化 | セツ（雪）セツ　　　　　　　　　　　　　　　セツ　　　　 セツ |

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 喉内k | 促音化 | ɦɔk-------→gaQ（学校）-------------------→gaQ（がつ）-→gaQ（がっ） |
| 母音化 | カク（各）　　　 カチ/カク（各各）　　　 　　　　　　　カク（各）  |

＊喉内入声kは舌内入声tに同認

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 唇内p | 促音化 | kap-------→kaQ（かつ）-------------------→kaQ（かつ）-→kaQ（かっ） |
| 母音化 | カフ（甲）　カウ（フ入声）　　　　　　　　　カウ　　　　　コー |

＊唇内入声pは舌内入声tに同認

＊促音化はローマ字（ひらかな）で、開音節化はカタカナで示してあります。

＊「」：東大国語研究室蔵大般若経建長六年校本（沼本　1974：21）。

＊「甲」（狎韻2等ăp）の例：「」「」。

＊小松氏の誤認説によって上の変化を考えてあります。

ここまで唇内・舌内・喉内入声の促音化の違いについてみてきましたが、ここで江戸中期の『音曲玉淵集』（三浦著1727年）の記述を次にみてみます（三浦　昭和50：42）。

「一　歌書并呉音ハツの音ヲちト唱ふ定格也

　　　　（中略）

惣してツの音の字ハ一字にても二字にてもつめて唱へ或ハのみてうつり又ハちト唱へ替とかく直には唱へず」

また江戸初期のロドリゲスの『日本大文典』（1604-8年刊）には次のような記述がみられます（土井訳注　昭和30：637）。

「（上略）例へば，Taixetta（タイシェッタ），Xixetta（シシェッタ），Connitta（コンニッタ）はTaixetua（大切は），Xixetua（師説は），Connichiua（今日は）である。尤もこの二つの方法は，両方とも発音され得る。」

　ところで室町時代初期の世阿弥自筆の伝書といわれる『花習内抜書』（1418年）には次のように小書きされた「ッ」がみられます注33（岩淵　昭和52：60）。

1．「ホンゼ***ッ***タヽシクテ（本説正しくて）

ケ***ッ***ク（結句）

コノジセ***ッ***ノノウ（この時節の能）（以下、略）」

＊「小書きのツ」はブロック斜体の小字「***ッ***」で示してあります。

さらに時代をさかのぼり、院政時代ころの和語の促音については、次のような観察があります注34（外山　昭和47：227）。

「促音も、すでに前代（筆者注：古代）に発生し（擬声・擬態語などでは本来あったであろうが）訓読語を中心に多く見られる。（改行）本期においても、ひきつづき訓読語を中心に、片カナ混り文などに多く見られる。（改行）促音は、撥音とその調音点が近似しているため、その表記は同じ形をとることが多かった。前代においては、むしろ同一の音韻として考えられていたと思われるふしがある。（改行）本期においても、前期（院政・鎌倉）の間は、撥音と同じ符号（レ）か無表記かが、ふつうの表記法であったと云われる。

『高山寺蔵古往来』（院政末期）では、

のごとく両用の表記がみられ、さらに同書には、「」「」のごとく「ツ」を用いた例もある。（東洋大学「王朝文学」九号、昭和四〇・十二）。

右の「ツ」表記によるものは、院政から鎌倉初中期にかけて個別的に見えはじめ、鎌倉後期に至り、かなり一般化してくるようである。」

そこで舌内入声の表記の変化をみると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| A | B | C | D | E | F | G | H |
| 呉音・漢音 | 漢書楊雄伝 | 石山寺蔵法華義疏 | 金光明最勝王経音義 | 無明抄（鴨長明） | 花習内抜書（世阿弥自筆） | 日葡辞書 | 現在の表記 |
| 奈良平安 | 948年 | 1002年 | 1079年 | 1211-6年頃 | 1418年奥書 | 1603年 |
| チ/ツ | ム | 撥音符号 | 同音字表記のみ | みなすてて | 小書きのッ | chi/tçu,t | チ・ツ・ッ |
| 注35 | 注36 | 注37 | 注38 | 注39 | 注40 | － | － |

A.呉音はチ、漢音はツ。

B.「tの方は常にムで記されて居る。」（岩淵　昭和52：131）。

C. 「撥音を表わす符号と同じものをもって表記（略）」（同書：240）。

D. 「一つも万葉仮名で書いたものがない」（同書：132）。

E. 「～かきにくきなどをば、みなすててかくなり。」（同書：59）。

F.「コノジセッノノウ（この時節の能）」（同書：60）。

G.「Bechi（別）/Butçuji（仏事）」（土井・森田・長南編訳　1980：53,68）。

H.現在の促音は小書きのツ。

1. ふたたび「」の表記を考える

この節ではふたたび「脚榻」の表記を考えます。第4節では宋代の弱化した入声（声門閉鎖音/ʔ/）を禅僧が持ち帰り、その音が当時の日本語のツに似ていたために「ツ」で表記されたという、濱田氏の考えを紹介しました。

そこでこれからの議論の出発点となる、濱田氏の考えを次にみておきます（濱田　1950a：103）。

「（上略）若ししかりとすればキャタ（脚）チャ（）の如き語尾に現れるこの（筆者補：唇内）入聲音までも「ツ」と表記（原注）し、而も現代語で文字通りtsuと發音することは、從來考へられてゐた樣に例へば「雜」や「立」が一般に單獨でも「ザツ」（zatsu）「リツ」（ritsu）と發音されると同樣、熟語の上部要素となつて促音化し、これを一般に「ツ」で表はした爲に、後にその假名に引かれて、下部要素となつた場合或は單獨ででも「ツ」と書きtsuと發音される樣になつたと説明せらるべきではなくして、むしろ當時の本國音（筆者注：唐末～宋頃、弱化した入声、つまり声門閉鎖音）が我が促音と相似たものであつた爲と考ふべきものかも（原注）知れない。（以下、略）」

＊波線と下線は筆者補。

＊小松氏の考え（波線）を唇内入声にたいする「誤認説」（あるいは同認説）、また濱田氏の考え（下線）を「声門閉鎖音説」と、いまよんでおきます。

ところで濱田氏の上の「声門閉鎖音説」を批判して、小松氏は最初に検討されるべき問題があるとして、次のように述べられています（小松　1956：69）。

「さて、これらの字（筆者注：唇内入声字）について、なぜこのような特殊な現象がみられるのかを解明するに当って、最初に検討されなければならないのは、この分化（筆者注：ウ音化（たとえば「」）と促音化（たとえば「」））の契機が中国語自体のなかにあったか否かである。時代を中古音以前に限定するならば、

a、韻書や字書に舌内入声またはそれを暗示するような反切が見当らない。

b、上古音においても同様である。（原注5）

c、「立」「粒」など、同一の反切を持つ文字が、別種の分化をとげている注41。

d、平安朝以前の資料において「ツ」表記した例は極めて稀である。

などの諸事実によって否定される。またこれらの字と同一の諧声符を共有し、使用頻度の高い字が、舌内入声韻のなかに見出せないようであるから、いわゆる百姓読み注42であると考えることも妥当性を欠くようである。

問題とされねばならないのは、従って唐代末期以後の中国本土における入声音の消滅過程との関係である。（略）それ（筆者注：中国語入声p/t/k）が全く消滅する以前に、現代呉語にみられるようなglottal stop（筆者注：声門閉鎖音/ʔ/：第4節参照）の段階が存在したことは確かであり、それが宋代以後輸入された字音に反映していること（下線は筆者）と、いま取り上げた問題との間の必然的連関があるかどうかを明らかにしておく必要があるのである。（以下、略）」

＊下線は先に紹介した濱田氏の考え。

上のような問題意識をもたれた小松氏は唇内入声のツ表記と中国の入声韻尾消失とのあいだの関係にたいして、次のように述べられています（上書：70）。

「（略）この（筆者補：唇内入声pがツ表記される）現象は、中国における入声韻尾崩壊の過程とは別個に―すなわち国語史の側面だけから―説明できることになるのではないかと思うのである。」

このように唇内入声の変化にたいする考えには濱田氏と小松氏（また沼本氏）には違いがみられます。

そこで筆者の理解によって、その違いをまとめると次のようになります。

上古　　　　隋～唐代　 　　　　　　　 宋代　　　　　　　　　 現代

中国語：t/p-------→t/p-→t/p -------------→ʔ-----------------------→φ（消失）

　 （呉音）↓　　↓（漢音）　　　　 ↓（禅僧が声門閉鎖音を持ち帰る）

入声p（濱田説）　：↓　　↓　　　　　　　　　ツ（促音Qに似る）-----→ッ（Q）

入声p（小松説）　：p----→p--→Φu→Φ→ツ（舌内入声Qに誤認）------→ッ（Q）

入声p（沼本説）　：p----→p-----------→ツ（促音Q）----------------→ッ（Q）

入声t（各氏同じ）：t----→t---→ツ（促音Q）----------→ツ（Q）-----→ッ（Q）

奈良・平安～院政時代　　 鎌倉時代　江戸初期　　　　 現代

＊時代は概略。

＊濱田説（同認説）：中国語の弱化した声門閉鎖音を促音ツに似ていた（近似）と考えるもの。

＊小松説（誤認説）：舌内入声はすでにツの表記がなされていて、そのツに誤認されたとみる考え。

ところで唇内入声pがツと表記された理由については上にみたように各氏違っていますが、宋音の唇内入声字が当時のツに似ていた（同認であれ、誤認であれ）と考えると、『日本国語大辞典』が「キャタツ」にたいして「「脚榻子」の唐宋音よみ」（第2節参照）としていることには疑問がでてきます。なぜなら鎌倉時代、禅僧が持ち帰った宋音を「脚榻子」と考えれば、その語尾の「子」（精母止韻4等上声tsiei）は陰類（その当時の韻尾は母音）であり、唇内入声はその当時弱化した声門閉鎖音であったとみる考え（第3節の有坂氏のBの考え）と矛盾するでしょう。そして室町時代の古辞書には「脚榻」はみられても「脚榻子」はみられません（第3節参照）。また江戸初期の『日葡辞書』にも「Qiatatcu.キャタツ（脚榻）　Qiatat（脚榻）という方がまさる.同上.」（土井・森田・長南編訳　1980：492）との記述がみられますが、「脚榻子」はみられません。そこで禅僧が持ち帰った宋音を「脚榻」とみれば、「榻」（透母盍韻thap）の韻尾が声門閉鎖音に弱化していて、その声門閉鎖音が当時のツの音に似ていたと考えることができるので、禅僧が持ち帰った宋音は「脚榻子」ではなく、「脚榻」であったとるのがよいでしょう。

そこで鎌倉時代、禅僧が持ち帰った宋音は「脚榻」であり、「脚榻子」は現代の学者が作りだした幽霊語であると考えてみます。しかしそう考えてもなお疑問は残ります。なぜなら第2節でみたように、禅僧が持ち帰ったと考えた「脚榻」の語は現代中国語の辞書にはみられず、かわりに「脚踏子（儿）」がみられます。そこで隋唐時代に借入した「脚踏」が現在の中国語に「脚踏子（儿）」として残存しているのに、宋代に中国から借入した「脚榻」は現代の中国語辞典にみられないのであれば、本家中国では新しい「脚榻」が完全に消滅してしまったと考えなければなりません。しかし古語（「脚踏子（儿）」）が残っているのに、新しい「脚榻」が残っていないというのは不思議なことといわなければなりません。そこで宋代の中国語には「脚榻」がそもそも存在しなかったと考えると説明がつくでしょうが、宋音として持ち帰ることができない「脚榻」を禅僧が持ち帰ったと考えると、これまた矛盾が生じます。
　そこで当時の中国語にはなかった、つまり禅僧が持ち帰ることのできなかった「脚榻」が室町～江戸期の日本語に存在したという矛盾を回避するために、宋音として持ち帰ったのは「脚榻」ではなく、耳で聞きおぼえた（いまローマ字でかりに）kyataʔであったと考えなおしてみます。そう考えれば、その韻尾にあった声門閉鎖音（[ʔ]）が当時のツによく似ていた（kyataʔ≒kyatatu）ことから、当時の禅僧は持ち帰った（聞き覚えていた）kyataʔを「脚榻」（kyatatu）と表記したと考えれば、上の矛盾を解消できるでしょう。

しかし、しかしです。このように考えると、また違った疑問がでてきます。第3節で室町時代の文献にみられる「脚蹈」「脚榻」の表記をみましたが、『下学集』（1444年）や『撮壤集』（1454年序）など主に古い辞書には「脚蹈」や「脚踏」がみられます。それにたいして『温故知新書』（1484年）や『書言字考』（1741年）などには「脚蹈」や「脚踏」はみられず、「脚榻」がみられます。そこで「脚蹈」（「脚踏」）と「脚榻」の表記の時代差を考えれば、鎌倉時代の禅僧が持ち帰ったkyataʔは「脚榻」ではなく、「脚蹈」（「脚踏」）なのではと考えられてきます。しかし奈良・平安時代までに借入していて、すでに日本に存在している「脚蹈」（あるいは「脚踏」）を再び宋代に持ち帰ったと考えるのは少々おかしな話です。では古代の「脚蹈」（「脚踏」）と江戸時代の「Qiatatcu」（「脚榻」）との関係はどう考えればよいのでしょうか。

そこでこの難しい問題を解決するために新漢音のかな表記についてみてみます。唐末に移入された新漢音では「「菩薩」‘ホサ’」（藤堂　1980：173）のように、舌内入声「薩」（心母曷韻1等sat：漢音サツ）の韻尾tのかな表記ツはみられません。そしてこのような入声韻尾の無表記は中国語の中古入声の弱化した声門閉鎖音（[ʔ]）の状態を反映している（藤堂　1980：173；第4節参照）とみられるので、新漢音の「薩」の変化をsat→saʔ（サ）のように考えることができるでしょう。そしてその後、「薩」の発音saʔ（サ）の声門閉鎖音がツの音に似ているととらえられるようになったと考えれば、舌内入声字の「薩」（sat→saʔ）が「サツ」と表記されるようになったことをうまく説明できるでしょう。そこで同じように唇内入声p（→ʔ）が舌内入声t（→ʔ）に誤認（小松氏の考え）、あるいは同認されたと考えれば、漢音「脚踏」はkyathəp（「踏」：透母合韻thəp）→kyatəʔへと変化したと考えることができるでしょう。そして、さらにkyatəʔはkyataʔへ変わったと考えれば『温故知新書』（1484年）に「脚榻」（「榻」は透母盍韻thap）の表記がみられることを「発音におうじてその表記が「脚踏」→「脚榻」のように変わった」とうまく説明できるでしょう。そこで鎌倉時代の禅僧が唐音（＝宋音）「脚榻」を持ち帰ったのではなく、漢音の「脚踏」が鎌倉時代に「脚榻」の発音に変わっていたと考えることにします。
　そこでこの「発音の変化におうじてその表記が変わる」という、大胆な、思いもよらない考えを「キャタツ」にたいして考えると、次のような変化を考えることができるでしょう。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 奈良・平安時代 | 室町時代 | 江戸期 | 現代 |
| 単字 | 蹈 | 踏 | 榻注43 | 達 | 立 |
| 韻目（中古音） | 号韻（og→)au | 合韻əp | 盍韻ap | 曷韻at | 訓読み（ツ） |
| 中古音の変化 | 有気清音化/入声弱化　　　重韻合流　　開音節化　　訓表記 |
| 「脚立」の変化 | kyadau-------→kyathəT--→kyathaT----→kyatatu--→kyatatsu |
|  | 注44 | 注45 | 注46　 |  | 注47 |

＊「脚」の変化は考察せず、kyaで表記。

＊T：ロドリゲスの詰字T（第10節参照）。

ところで濱田氏は弱化していた入声韻尾の声門閉鎖音（/ʔ/）が当時の促音ツ（/Q/）に似ていたと考えられたのですが、それと同じようにみえて、しかし似て非なる全く別の筆者の考えを紹介しましょう。それは禅僧の持ち帰った声門閉鎖音が師資相伝によって、あるいは他の学僧や博士家の学者たちに伝わるなかで、入声韻尾の声門閉鎖音がツに変化したとみる考えです。

この筆者の新しい考えと濱田氏の考えは次のように比較できるでしょう。

上古　　中古　　 宋代　　　　　　　　　　　　現在

中国語唇音入声　：p-----→p------→ʔ-------------------------→φ（消失）

↓

日本語（新説） ：　　　　　　　　 ʔ（ツ）→Q（ツ）----------→Q（促音ツ）

（濱田説）：　　　　　　　　 Q（ツ）-------------------→Q（促音ツ）

＊新説はʔ→Q、濱田説はʔ≒Q（近似）と考えてあります。

＊上では弱化した唇内入声の声門閉鎖音（[ʔ]）を禅僧が持ち帰ったと仮定しています。

では当時のツは禅僧が中国で習い覚えたところの弱化した唇内入声（声門閉鎖音）そのものだったのでしょうか。それとも濱田氏が考えられたように、その弱化した唇内入声（声門閉鎖音）によく似ていた日本語の当時のツだったのでしょうか。

1. 声門閉鎖音と促音の似かよりを考える

前節では鎌倉時代の促音表記に用いられたツは声門閉鎖音だったのか、それても声門閉鎖音に似ていた促音だったのかという疑問を提起しました。

そこで声門閉鎖音と促音の似かよりを考えるために、現在の促音の特徴を次にみてみます（高山倫明　2012：129,28）。

1.「促音は母音のあと、かつ無声の破裂音・破擦音・摩擦音のまえに現れるのを原則としており、次のような、表情音や強調形、あるいは外来語といった周辺的な部分をのぞけば、促音に有声音が連続することはない。

・スッゴイ（凄い）、ガンバッゼ（頑張るぜ）、ヒッドイ（酷い）、スッバラシー（素晴らしい）、アッラー（あらあら）…

・バッグ（bag）、バッジ（badge）、ベッド（bed）…

例外となる外来語も、日本語への馴化にともなって後続音が無声音に変わる傾向がある。

・バック、バッチ、ベット…」

2.「方言によってはコッゴ（国語）・カッジャ（鍛冶屋）・テッドー（鉄道）・ヤッバ（役場）などの語形を普通に有するところもある。（略）」

またツ表記される音については次のような観察があります（城田　1995：94）。

「**注記**　≪ギャーッ≫≪キャーッ≫のような強調的・創作的オノマトペや強調的心情表出の感動詞≪ハイッ≫などでは，閉鎖が声門，時には舌の先と歯茎でつくられることがあり，日本人には表記（ッ）からも伺えるよう，つまる音Tともとれるような子音が出現する注48。（略）」

このように声門閉鎖音と促音はよく似ているとみられるのですが、服部氏はその関係を次のように考えられました（同書：170）。

「（イタリア語の重子音については省略）日本語の「つまる音」は概略的にいってその後續子音とともに重子音をなすといえる。たとえば，[issuɴ](一寸), [iʃʃaku](一尺)，[ippo:](一方)，[itto:](一等)，[ikko](一個), [ittsu:](一通), [ittʃi](一致)．しかし，この重子音の前半部においては喉頭の緊張が共通して存在するから，これらは音韻論的には/’iʔsuN，’iʔaku，’iʔpoo，’iʔtoo，’iʔko，’iʔcuu，’iʔci/と解釈すべきものである．」

しかし促音（/Q/）と声門閉鎖音（/ʔ/）の関係を上のようにみる服部氏の考えにたいして、次のような批判があります注49（城生　1977：119）。

「（上略）しかし、例えば/Q/が有する共通の特徴は、[is▢s’ɯɴ](一寸)、[iɕ▢ɕ’o](一緒)、[ip▢p’oɴ](一本)などの例からも明らかなように、声門閉鎖音[ʔ]の存在などではなく、むしろ先行子音を一モーラ分遅らせてから開放させる点にある。このことは、発音時の喉頭の運動をdynamicに観察した結果、/Q/に該当する部分ではむしろ声門が開いていることを報告した沢島正行（一九七三）の研究などによっても裏付けられている。（下略）」

　このように促音（/Q/）と声門閉鎖音（/ʔ/）は「似て非なるもの」とみられるのですが、琉球方言（それぞれ奄美名瀬方言/奄美喜界島羽里方言/那覇市久米町方言）にはそれを裏づける次のような報告があります(寺師 1985：47/柴田 1988：332,366)。

1. 「上のように方言では，促音の後のkおよびtには’（筆者注：声門閉鎖音/ʔ/）がついてk’およびt’の形（筆者注：喉頭化音）になるのが普通である。従って特に漢字音の読み（筆者補：「sïQk’ak’u　「折角」」（寺師 1985：22））にまでその傾向が強く出て, 標準語との趣きの相違を目立たせている注50。」
2. 「喉頭化音も声門閉鎖音も喉頭の緊張を伴い、喉頭において調音されるという点で、性質を共通にする。もっとも、つまる音のQにも喉頭の緊張があるが、Qは音節末に来るか、ときに自ら音節を形成する（例、Qs’a 「足」）点で喉頭化音とは異なる注51。」

3．「なお、Qのあとのp、t、c、kはつねにp’、t’、c’、k’となる。Qの持つ喉頭の緊張があとの子音にまで及んだ結果である。音韻論的に有意味ではない。」

このように声門閉鎖音と促音とがよく似ているとはいえ、音声的に同じものではない（ʔ≠Q）ので、何か特殊な事情（理由）がないかぎり前節で考えた新説（ ʔ→Q）は成りたたないようにみられます。そこで第12節で再び考えることにして、いまは禅僧の持ち帰った声門閉鎖音（/ʔ/）が当時の促音ツ（/Q/）によく似ていた（ʔ≒Q）という、濱田氏の考えを認めておきます。

1. 『日葡辞書』『訓民正音』の入声を考える

さてここからは禅僧が持ち帰った声門閉鎖音（弱化した唇内入声）は当時の促音ツによく似ていたためと考えます。しかしそう考えるためには当然舌内入声tがその当時までに促音ツで表記されていることが必要です。

ところで中国語の中古入声tを借入した日本語の舌内入声は次のようにみられています。

1．古代に借入された舌内入声tは呉音でチ、漢音でツとして伝わった。

2．古代に借入された舌内入声tは江戸初期の1600年ころまでtとして残存した。

そこでここからは上の第2項の舌内入声tが江戸初期の1600年ころまでtとして残存したという問題を考察することにします。

宣教師ロドリゲスの『日本大文典』（1604-8年）には、入声形tと開音節形ツの関係について、次のような記述がみえます（土井訳注　昭和30：642,231）。

「（上略）日本のことばはすべて母音か子音のN，Tかに終ってゐる。（略）」

「〇ある綴字でTに終るものは，日本では‘つ’（Tçu）の綴字に当るのであって，そのTを‘詰字’（Tçumeji）と呼ぶ。さうしてTそのものを写す文字がないので，「Guatと書くべきを‘ぐわつ’（Guatçu）と書く。」

上の記述は次のようにまとめることができるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 入声形 | 開音節形 |
| ロドリゲスの記述 | T（詰字） | 母音ツ |
| 文典中の表記 | t | tçu/chi注52 |

筆者はロドリゲスの原著をみていず、また読む能力もありませんので、以下、土井氏の訳文で考えていきます。

ロドリゲスは「詰字のツ」（T）とみられる語にたいして、「Butmiŏ（仏名）/Xet（節）」（土井訳注　昭和30：68,756）のようにtで表記しています。そこでささいな疑問が起こります。なぜなら「仏名」や「節」の韻尾が通説のようなtであったなら、なぜロドリゲスは「…Tかに終ってゐる」ではなく、「…tかに終ってゐる」と記述しなかったのでしょうか。このような疑問をもてば、ロドリゲスが「詰字のツ」とよんだTは通説のようなtではなかった（T≠t）とみるのが自然でしょう。そこでロドリゲスの記述をみなおすと、「Tそのものを写す文字がない」と述べているので、たとえば「月」（GuaT）の表記を説明するためには、Tではない代用のtを使って、「Guatと書くべきを‘ぐわつ’（Guatçu）と書く。」と述べたのではないかと考えられてきます。

ところで江戸初期の舌内入声は通説で考えられているようなtではないという筆者の考え注53は、すでに次のように濱田氏によって表明されています（濱田　昭和58：84）。

「（上略）従って、その当初においては、一往音韻体系外の特殊な発音形式（筆者注：舌内入声をt）として取扱うことが許されるにしても、八百年もの間永続した後における、一般的な発音をも同様に考えることが出来るかどうかは、甚だ疑わしいと言わざるを得ない。」

では古代に借入した中国語の舌内入声は江戸初期でもtだったのでしょうか、それともそうではなかったのでしょうか。

そこでこの疑問を考えるために『訓民正音』（1443年成）をみると、終声（ㄷ：t）について、次のような記述がみられます注54（趙訳注　2010：173）。

「「質」、「」などの韻は「ㄷ」音（[t]）を終声とすべきであるのに、世間では来母（[l]）を用いる。来母の声はゆるやかで入声にふさわしくない。これは四声がかわったものである。（以下、略）」

上の『訓民正音』の規定にたいして、『東国正韻』（1448年刊）の序には次のような記述がみえます注55（同書：182）。

「（略）さらには質・勿のような入声の韻は影母（ㆆ）をもって来母（ㄹ）を補うというように、俗音を基本に正したので、古くから続いてきた誤りはここに至って尽く改まった。」

そして趙氏は上の「以影補来」について、次のように訳注されています（同書：182－3）。

「（2）　以影補来…入声のうち、中国音で[-t]に終わるものは、朝鮮漢字音ではㄹ（[-l]）に終わる。しかし「ㄹ」は閉鎖音でないため、厳密には「入声」と呼ぶには相応しくない。そこで、『東国正韻』の編纂者は、「ㄹ」に声門閉鎖音「ㆆ」（[-ʔ]）を添えて「ㅭ」（[-lʔ]）という、いわば現実の漢字音と、あるべき入声の閉鎖性との折衷的な人工音を考案した。（略）」

上の規定にみえるlʔを日本を含めた現代の学者たちは「折衷的な人工音」とみて、『東国正韻』は「資料性において劣る」と、次のように断じています注56（河野　1968：27）。

「かやうに，東國正韻の字音は外見は極めて整然たる体系を示してゐるが，それは人為的な整理の結果であつて，この韻書の資料的価値を著しく低減せしめてゐる。（略）」

しかしここで注意すべきことがあります。なぜなら『東国正韻序』では俗音lをlʔへ「因俗歸正」（俗音を正した）と述べているからです。そしてこの「俗音を正した」という言葉を信じれば、正された俗音（当時の舌音入声）はl（ㄹ）ではなく、lʔ（ㅭ）であったとみなければならないでしょう。そしてそうであれば『東国正韻』のㅭ（lʔ）こそが伝来の舌音入声であり、その後、いわゆる伝来漢字音で表記されているとみられている『六祖』のㄹ（l）に変化したとみるのが、『東国正韻序』の正しい読みかたでしょう。

そこで15世紀ころの舌音入声韻尾をlʔ とみなおせば、中国語中古入声とそれを借入した朝鮮漢字音（入声）の変化を、次のように考えることができるでしょう。

　　　　 601年　　　　　1324成/1375年刊

　　　　切韻　　　　　　中原音韻/洪武正韻　　　　　　　 現在

中国語：tʔ----┬-------------→ʔ-----------------------→φ（消失）

（北方方言）　　│　　　　　　　│

　　　　　　　│　　　　　　　洪武正韻譯訓注57（ㆆ：声門閉鎖音/ʔ/）

　　　└------------→lʔ（ㅭ）----→l（ㄹ）----→ɭ（そり舌音l注58）

東国正韻　　 六祖　 　　　現在

1448年刊　　 1496年刊

＊『東国正韻』の「ㅭ」（lʔ）と『洪武正韻譯訓』の「ㆆ」（ʔ）が齟齬すること、また『切韻』時代の入声をtʔと考えることについては注59。

＊六祖（『六祖法寳檀經諺解』）：「唐の六祖大師慧能の説法をまとめたものを諺解したもの。」（福井　2013：243）。

1. 江戸初期の「ツ」の音を考える

前節では『切韻』時代の中古舌音入声をとりあえずtʔと考えましたが、そうであれば同じころ（唐代）に借入した日本語の舌内入声もtではなく、tʔであったと考えられるでしょう。そこで舌内入声をtʔとみることの是非を考えるために江戸初期のツについて考えることにします。

まず、当時の日本と外国資料にみえる「（時）節」の表記をみると次のようになっています。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| A | B | C | D |
| 松浦の能 | 日本風土記 | 難語句解 | 日葡辞書 |
| 世阿弥 | （明人）侯継高 | バレト神父 | イエズス会宣教師 |
| 1427年 | 1592年ごろ刊 | 1592-3年刊 | 1603年刊 |
| ジセッモ（時節モ） | 設子　せつ | Jixet（時節） | Iixet　時節 |

＊A：「コノジセッノノウ（この時節の能）」（岩淵　昭和52：60）。

＊B（『全　浙兵制考日本風土記』）

「中秋阿金那設子あきのせつ/冬至府由那設子ふゆのせつ」（京大国語国文研編　昭和36：60,60）。

＊C：「Jixet.fi,toqi,hora.tépo determinado &t」（森田　昭和51：31左8行）。

＊D：「Iixet.ジセ***ッ***（時節）」「Xet.セ***ッ***（節）」「Xetbun.セ***ッ***ブン（節分）」（土井・森田・長南編訳　1980：366,756,756）。

また『三本對照捷解新語』注60（1676年刊：以下、捷解新語と略）と『重刊改修捷解新語』（1782年刊）には、ツの表記は次のようにあらわれています注61。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | せつ/せつつ（節） | しせつ（時節） | せつく（節句） |
| 捷解新語 | 셰쭝（syəi ccuŋ）/셔쭈（syə ccu）せつ） | 시셰쭝（si syəi ccuŋ） | 셷구（syəit ku） |
| 重刊改修捷解新語 | 셰쯔（syəi ccɨ）/셷즈（syəit cɨ：せつつ） | ᅀᅵ셰쯩（zi syəi ccɨŋ） | 셷꾸（syəit kku） |

＊『捷解新語』：京大國語國文研編　昭和47：14上/334上,102上,104上。

＊『重刊改修捷解新語』：同書：257下/334下,102下,104下。

上の単書表記（셷즈）と初声を重ねた並書表記（셰쭝）の違いは『捷解新語』の「有って」にもみられ、亀井氏はその違いを次のように比較されました（亀井　昭和59：363－4）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 表記 | 仮名表記--ハングル表記（翻字） | 本文表記 | ㄷ/ㄸの表記 |
| 単書 | あつて-----앋뎨（’at tyəi）  | 「つ」あり | 第一音節末と第二音節頭にㄷ（t） |
| 並書 | あて-------아뗴（’a ttyəi） | 「つ」なし | 第二音節のはじめにㄸ（tt） |

＊『捷解新語』（京大國語國文研編　昭和47：195上,245上）より再引用。『重刊改修捷解新語』には「あつて　앋뎨（’at tyəi）」（同書：139下）。

そして上の表記の違いから、亀井氏は単書表記を促音ツ注62に、並書表記を次のようにみられました（亀井　昭和 59：367)。

「初声を重ねる形（筆者注：並書表記）はいはゆる勁音（된시옷）と同じく声門の破裂（glottal explosive）の音をあらはすものかと思はれる注63。」

そこで濱田氏の次のような考えがでてくるでしょう（濱田　昭和58：92）。

「なお、『捷解新語』のccu（筆者注：쭈）というハングル表記が、もし信ずべきものであるとするならば、当時の「つ」（舌内入声韻尾のみならず一般にツの音節すべて）は現代語の[tsu]とは異り、その前にglottal stopを伴う[ʔtsu]もしくは[ttsu]の様な音であったかも知れない。しかりとすれば、『日本風土記』が「」を「子」で表わしているのものも、よりよく理解出来るであろう。（以下、略）」

ところで第7節で平安時代以前には和語（擬声・擬態語をのぞく）には促音のツ表記がみられないことを紹介しておきましたが、12世紀初頭に成った『類聚名義抄』（図書寮本）には促音を表記したとみられる入声・徳声点がみられます。

その入声点をはじめて学界に紹介された、小松氏は次のように述べられています（小松　昭和56：197-9）。

「十二世紀初頭ごろに編纂された漢和字書、『類聚名義抄』（図書寮本）の和訓の仮名には、（略）わずかながら、《徳》《入》の両声点が用いられていることが特に注目を引く。

は、平声（低平調）のあとに-p,-t,-kの続いた音節であり、徳声は入声とも呼ばれ、上声（高平調）のあとに-p,-t,-kの続いた音節であって、いずれもCVCの形をとるものである。これらの音節末子音は、いずれも完全な破裂をおこさない内破音（-,-,-）であるために、音節全体の印象が、ぐっとつまった感じになるのが特徴である。（中略）和訓の仮名に加えられたものとしては、これまでに知られているすべての文献資料を通じて、ここに見える左（筆者注：下）の四例が指摘できるにすぎない。

　　訴　ウタフ（入上平）　　　　　　〔七五5〕

　　訟　ウタフル（入平平上平）　　〔九二4〕

　　愬　ウタフ（入上平）　　　　　〔二七五6〕

　　経　ノトル（徳上平）　　　　　〔二八七6〕

（中略）要するに、入声点付きの「ウ」は、低い調子のu-という音節を表わしていることになる。したがって、「ウ（入）タ（上）フ（平）」は、全体として［u-a-Φu(u)］という語形が[○●○]《低高低》というアクセントで発音されることを示している。「ノトル」の方は「ノ」に徳声点が付されているので高い調子になるところが違っているが、これもまたタ行音の前であることに注目したい。すなわち、「ノ（徳）ト（上）ル（平）」とは［no-o-ru］が[●●○]《高高低》というアクセントを持っているという意味なのである。これらの入声点や徳声点は、内破音のだけに当たるものではなく、同時に「ウ」や「ノ」の仮名の高低をも示していることを忘れてはならない。［u],［no]はそれぞれ一つの音節として把握されているのである。（中略）すなわち、[uttaΦu]の[ut], [nottoru]の[not]は、いずれも漢字音の入声・徳声と同じ音声的特徴を持つものとしてとらえられ、そして、ここではそのように記号化されているということなのである。」

そして小松氏は日本語の促音表記の変遷を概略、次のようであると述べられています（上書：199-200）。

「促音便形における促音部分の無表記は、すでに平安時代初期の訓点資料から見えているが、それが文字化されるのは十一世紀に入ってからのようであって、はじめは「渉ワタム（て）」（←ワタリテ）、「昇ノホンテ」（←ノボリテ）などのように表わされている。（中略）その後、漢字音のに「ツ」の仮名があてられるようになると、この種の促音もそれにつれて「ツ」表記に移行し、それが「欲ホツス」「専モツハラ」のように、タ行の前以外の位置のものにまで拡大されて、平安時代のうちに促音の「ツ」表記はほぼ確立された。その伝統が今日にまで及んでいるのである。これをタ行音の「つ」[tsu]と区別して小書きにする習慣が確立されたのは、「現代かなづかい」になってからのことである。（略）」

このように促音は撥音表記と同じ表記からツへとかわってきたのですが、『平家物語』（延慶本の奥書、1309年までに成立か）では促音ツが表記されなかったと山田氏は次のように述べられています（山田　昭和29：下巻1766）。

「（前略）以上、促むる音便はそのあらはれたるもの延慶本全體を通じて、一例だにも「ツ」字を用ゐずして、その本の音は勿論、促まれる音の記號をも加へざるは最も注目するに値ありとすべし。惟ふに長明が無名抄に「入聲の文字のかきにくきなどをばみなすてゝかく也」といへる如くに省きてかきあらはさゞるものか。然れども既に屡例示せる如くに寫聲の語にては「キツト」「サツト」など、「ツ」字を以て記載せるものあること既に第二章の第七節にも説きたるところにて明なる如くなれば、當時必ず入聲を記載せざりしものとはいふべからず。これを以て考ふれば、この音便は實は今日の東京語などにいふ如く、急促に呼ぶものにあらで、なほ平曲に保存せられたる如くに前の音を稍長く呼びて次の音にうつり行き、中間の音は實は微にして殆ど省かれたる如きすがたになりたりしものにあらざるか。なほ後の研究をまつものなり。」

ところで上の『平家物語』では、「（上略）延慶本にては「モチテ」を「モチ」とせるもののみを見る。（略）」（上書：下巻1760）との記述があり、この「チ」は現在の「もって」に変わっていることから、この「チ」には表記されないツが内在していると考えることができるでしょう。そしてこの内在化していたツが表記されるようになったことを通説では「促音ツの発生」といっているとみることができるでしょう。

そこで『捷解新語』の「あて」（ツの無表記）から『重刊改修捷解新語』の「あつて」（促音ツの表記）への変化を次のように考えることができるでしょう。

並書表記（捷）　　　　単書表記（重）　　　　 現在

表記：「あて」　　　　 　　「あつて」　　　　 　　「あって」

아뗴（’a ttyəi）　　앋뎨（’at tyəi）

発音：　aʔte--------------→［a-e］（＝aQte）---→aQte

＊捷：『捷解新語』。重：『重刊改修捷解新語』。
＊並書表記のʔteは濃音。［a-e］は小松氏の表記。Q：現在の促音ツ。

＊「」（院政末期の『高山寺蔵古往来』：第7節）は『捷解新語』の「あて」に対応。

同じように「節」の変化は次のように考えることができるでしょう。

並書表記（捷）　　　 単書表記（重）　　　　　　現代

表記：「せつ」　　　　 　　「せつつ」　　　　 　　　「せつ」

셰쭝（syəi ccuŋ）　　셷즈（syəit cɨ）　　　　　절（ser）

発音： seʔtsu------------→［se-sɯ］（＝seQtsɯ）--→setsɯ

＊（現在のツの母音）ɯ：ここでは平唇のウ（ɯ）の上部に2点（ウムラウト記号「‥」）を付加した文字の代用。

＊tsu→tsɯの変化には重大な問題があり、次回の更新で考えます。

＊「절（節）名せつ。ふし。（略）」（天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55：579）。

ここまで舌内入声のツについてみてきたのですが、『捷解新語』には語頭・語中・語尾に関係なく、次のような並書表記쭈（ccu）がみられます（京大國語國文研究室編　昭和47：276上,349上,35上/土井・森田・長南編訳　1980：623, 462,250）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 語頭 | 語中 | 語尾 |
| つ加わしらる | につき | ひとつ（注55） |
| 捷解新語 | 쭈가와시라루（ccuka’oasiraru） | 닏기（nitki） | 피도쭈（phitoccu） |
| 日葡辞書 | Tçucauaxi,su,aita.（遣はし，す，いた） | Nicqi（日記） | Fitotçu（一つ） |

＊『捷解新語』：「　읻빋（‘it pit）」（京大國語國文研究室編　昭和47：363上）。「　ᅁᅩ뎐비쭈（ŋkotyənpiccu）」（同書：361上）。「　기삳（kisat）」（同書：360上）。

＊『重刊改修捷解新語』：「　히도쯔（hitoccɨ）」（同書：69下）。

＊『日葡辞書』：「Ippit.イッピ***ッ***（一筆）」（土井・森田・長南編訳　1980：337）。

このように『捷解新語』では、ツにたいして並書表記の쭈が用いられているのですが、このような重ね子音表記はキリシタン資料においてもみられ、『かたこと』（京の俳人、安原貞室著1650年刊）では促音ツの表記としてあらわれています。

そこで「こち・あちこち・こそ」にたいする、それらの表記を比較すると次のようになります。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | こち注64 | あちこち注65 | こそ |
| A | バレト本 | － | achi cochi（『難語句解』） | coʃso（『自筆写本』） |
| B | 日葡辞書 | Cochi（こち） | Achi,cochi（あち,こち） | Coso（こそ）副詞. |
| C | 捷解新語 | 고찌（ko cci） | 아찌고찌（’a cci ko cci） | 고쏘（ko sso） |
| D | かたこと | こち | あつちこち | － |

A．バレト本：

1.『難語句解』（『天草版平家物語難語句解』1593年）：「Xoxode,tokorodokorode achi cochi.」（森田　昭和51:61右10行）。

2.『自筆写本』（1591の年記）：「coʃso（コソ。25v-8.ほか22例）」（同書:324）。

B．『日葡辞書』：土井・森田・長南編訳　1980：134,11,151。

C．『捷解新語』：京大國語國文研究室編　昭和47：11上,28上,11上。

D．『かたこと』：白木編著　昭和51：33,45。

そこで『捷解新語』と『重刊改修捷解新語』の時代差を勘案し、先の山田氏の「促むる音便」を促音Qの先祖***Q***とみれば、『かたこと』の「あち」から「あつち」への変化を次のように考えることができるでしょう。

並書表記　　　　　単書表記　　　　　 　現在

表記：「あち」　　　　 「あつち」　　　　 　 「あっち」

発音：a***Q***ci（＝aT）----→aQchi---------------→aQchi

＊Q：現在の促音ツ（/Q/）。***Q***：促音Qの先祖。

＊T：ロドリゲスの詰字のツ（次節の「節」の変化参照）。

1. 江戸初期まで舌内入声はtだったのか

前節では『捷解新語』の「셰쭝」（「せつ」）の表記から江戸初期の「」をseʔtsuとみましたが、『日葡辞書』では「Xet」（土井・森田・長南編訳：1980：756）と表記されています。

また当時の滞日者（商人アビラ・ヒロン）には次のような表記がみられます注66岩生・佐久間訳注　1965：90,93）。

「五月Gonguatz」「今月をコノキConoquiママ、コングヮツ Conguat」

ところで『日葡辞書』で入声形と開音節化形の両表記がみられることについて、次のような考えがあります（土井・森田・長南編訳　1980：854）。

「（上略）そのほか日葡辞書には，

Matçudai.l,Matdai（末代）

Qiatat.l,Qiatatçu（脚榻）

のように，見出し語に入声形と開音節化形とを並べ掲げたものがあり、Butji（仏事）のようにその開音節化形Butçujiをも見出し語に立てているものもある. 別条Qiatatçu（脚榻）の条にQiatatと言う方がまさると注し，Itonami,u（営み，む）の条に ButçujiよりもButjiの方がまさるとしているから，規範的には入声形を正しいとしながらも，話し言葉では開音節化の傾向が次第に進んでいたものらしい。」

また『捷解新語』第10巻の候文体の書簡文の特徴として、「itpit」「kisat」（前引「一筆」「貴札」）のような入声形tがみられることから、濱田氏は次のように考えられました（濱田　昭和58：92）。

「（略）語末に立つ舌内入声韻尾が、二種の形[t][tsu]で現れ、前者はより生の漢語層に、しかも、その使用する者の側から言えば、比較的教養程度の高い階級層、しかも、あらたまった場で用いられたものであり、後者はこれに対して、より国語化した語彙に、しかも比較的教養程度の低い一般庶民の側で、しかもくだけた言い方として用いられたのではないかと考えられる。」

このように入声形tと開音節形tçu（あるいはtçやtz）など二つの表記がみられることにたいして、国語学者は文言（規範形）と口語（くずれた形）、また位相差（階級差や教養の高下）、あるいは方言の違いといったものを考えることでその違いを説明します。しかしこのような社会言語学的な説明をすることで、「舌内入声はなぜtとtsuの2種に分化したのか」という、舌内入声にたいする根本的な疑問が回避されてはならないでしょう。なぜなら上のようなわかりやすい、口当たりのよい説明では古代の入声（つまりは借入元の中国語入声）の真実に迫ることはできないからです。

そこでもう一度当時の舌内入声を考えるために、しばらくはtとtsuの分化を人物の譬えで考えていくことにします。まず江戸初期の舌内入声のtとtçuを全く違った人物A（入声t）と人物B（開音節化されたtsu）だったと考えます。しかしそう考えると、人も言葉も移ろい変化するのが自然なので、なぜ人物A（古代の入声t）が二人の人物A（江戸初期の入声t）とB（tsu）になったのか、またその人物A（古代の入声t）が1000年もの長い間生きながらえたのか不思議になってきます。そこで江戸初期に二人の人物AとBが存在したのではなく、人物Aの顔を正面ではなく右側からみた横顔をt（入声形）、また左側からみた横顔をtsu（開音節形）であると考えなおしてみます。そう考えれば先の文言（規範形）と口語（くずれた形）、あるいは位相差（教養の高低など）といった、さらには人物Aの「よそ行き」と「普段着」の話し方の違いといったことを同一人物（ロドリゲスは詰字のTと記述）の左右の横顔の見え方のちがい（tとtçu）として説明できるでしょう。しかしこのようにtとtsuを人物Aの左右の顔と解釈しても、人物A（詰字のT）の右と左の横顔がtとtsuのように全く違ってみえる理由を説明することは難しいでしょう。

そこで人物Aの顔に錯視現象注67を考えることにします。人物Aの顔（詰字のT）を正面からみると、ほんのちょっとした視線の違い（視線の移動）によって、人物Aの顔（t）にも、人物Bの顔（tsu）にもみえると考えます。この少々とっぴでありそうもない考えによれば、当然、人物Aの顔（t）が錯視（視線の移動）によって、ある時には人物Bの顔（tsu）にもみえるでしょう。そこで宣教師たちはその錯視によってみえたAとBの顔（聞こえた音）を忠実にtやtsuで表記したと考えることができるでしょう。このようにロドリゲスの詰字ツ（T）が『日葡辞書』などでtとtsuに表記しわけされていることを錯視（視線の違い）によると考えれば、なぜ古代の入声tがtとtsuの2種に分化したのか、なぜキリシタン時代まで入声tがtとして存続したのかといった、疑問そのものを消し去ることができるでしょう。
　このtとtçuを音韻論的に一つのものであるとみる考えは、早くに濱田氏もだされて（濱田　昭和58：94-5）いますが、筆者の考えとは次のように大きな違いがあります注68。

濱田氏の考え：音韻論的には一つの/T/。tとtçuは別音。

筆者の考え　：音韻論的に一つの/T/（ロドリゲスの詰字T）。tとtçuは同音。

上の比較からわかるように、濱田氏は表記しわけられたtとtçuを表記のままにtとtçuの2音と考えられたことで、詰字ツ（T）はtでもあり、tçuでもあるという真実を見逃されてしまったのです。

さて日本語の舌内入声をtとみる誤謬の謎はこれで解けたのですが、では『日葡辞書』で「Xet」と写された当時の「」の音は実際どのような音だったのでしょうか。それをこれから考えてみることにします

『捷解新語』の並書表記고쏘（「こそ」）の「쏘」（sso）は現在、濃音とよばれていて、次のような日本語の促音ともみえる音です（羅聖淑　2008：11）。

「「濃音」は、喉頭の強い緊張を伴う無声無気音です。例えば、（略）＜짜＞は、「まっちゃ」の「っちゃ」、＜싸＞は、「あっさり」の「っさ」に似た発音です。」

このように韓国語の濃音（「[ʔk, ʔt, ʔp]」；福井　2013：23）は日本語の促音とまぎれる音なので、その濃音（ʔCV：並書表記CCV）を喜界島方言の喉頭化音CʔVと考えてみます（第9節参照）。また「こそ」はバレトの自筆写本ではcoʃso、『日葡辞書』ではcoso、『捷解新語』では고쏘（kosso：koʔso）と表記されている同時代資料なので、それらを同音の表記と考えれば「こそ」は喉頭化音のkosʔoとみることができるでしょう。

そこで「（時）節」と「こそ」（助詞）の発音と表記を比較すると、次のようになります。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 『松浦の能』 | 『日本風土記』 | 『バレト本』 | 『捷解新語』 |
| 1427年 | 1592年ごろ刊 | 1591の年記 | 1603年刊 |
|  | 推定音 | 原文表記 |
| （時） | setʔu | a.ジセッツモ | b.設子 | d.Jixet | f.셰쭝（seʔcu） |
| こそ | kosʔo | － | c.箇所 | e.coʃso | g.고쏘（koʔso） |

＊a：「ジセッツモ」（岩淵　昭和52：60）。

＊b/c：京大国語国文学研編　昭和36：60上段,46上段。

＊d/e（『難語句解』とバレト自筆写本）：森田　昭和51：31左8行,324。

＊f/g：京大國語國文學研編　昭和47：14上,103上。셰쭝（syəi ccuŋ）のŋは略してseʔcuで表記。

＊『重刊改修捷解新語』の「せつつ　셷즈」（syəitcɨ）/「こそ　고쏘」（kosso）：京大國語國文學研編　昭和47：334-5下,103下。

＊『日葡辞書』：「Xet」「Coso」（土井・森田・長南編訳　1980：756,151）。

そこでわかりやすいように上の推定音の音節の切れ目をナカ黒（・）で示すと、宣教師たちの「」の聞き取りとその表記を次のように比較することができるでしょう。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 『松浦の能』 | 『日本風土記』 | 『難語句解』 | 『捷解新語』 | 『日本大文典』 |
| 各人の聞き取り | 世阿弥 | 侯継高 | バレト | 康遇聖 | ロドリゲス |
| se・T | seʔ・tsɿ | se・tʔsu | se・ʔtsu | se・T（＝se・tʔçu） |
| 表記 | セ・***ッ*** | 設・子 | xe・t | 셰・쭝（se・ʔcu） | Xe・t |

＊ロドリゲスの「Xet」（土井訳注　昭和30：820）。Tはロドリゲスの詰字（tçu）。

＊「設」（中古音ʃɪɛt）の入声韻尾は弱化し声門閉鎖音、「子」（tsiei）は「tsɿ」（佐藤　2002：80）とみてあります。

このように当時の「節」「こそ」を喉頭化音のsetʔu・kosʔoと考えてみたのですが、しかし少々問題があります。なぜなら「漢字音のに「ツ」の仮名があてられるようになると」（小松　昭和56：200；第11節参照）、あるいは中国語唇内入声は促音ツに似ていた（ʔ≒Q：濱田説）などと、鎌倉時代の入声「節」は声門閉鎖音（/ʔ/）のあるsetʔではなく、促音のseQであったと考えられるからです。そして第8節では当時の中国語の入声韻尾が消失し声門閉鎖音になっていたことで、新漢音の語尾が表記されなかった（語尾ツの無表記）とみました。そこでこれらのことを勘案すると、「節」はset→seʔ（院政期）→seQ（鎌倉期）→setʔu（江戸初期）のような変化を想定できるでしょう。しかし入声語尾に声門閉鎖音が再び現れる ʔ→Q→tʔuのような変化は考えにくいので、setからsetʔuへの変化を矛盾なく説明できるアイディアが必要となるでしょう。

ところで『捷解新語』の「せつ」（「셰쭝」：syəi ccuŋ）と『重刊改修捷解新語』の「せつつ」（「셷즈」：syəit cɨ）にはかな表記の違いがみられます。しかし『捷解新語』と『重刊改修捷解新語』の「こそ」は同じ「고쏘」（ko ʔso；京大國語學國文學研究室編　昭和47：103上,103下）の表記がみられるのですが、かな表記には違いがみられません。そこで前節の「」や「」でみたように「ツ」の有無が促音Qの有無に対応していることを考えると、ツ表記がみられない「こそ」はkosʔo→koQso→kosoのような変化をしなかったと考えられます。そこで「こそ」（kosʔo→koso）と「節」（setʔu→seQtsɯ→setsɯ）の変化を矛盾なく説明するために、現代の促音Qの先祖を***Q***と考え、その***Q***が現在の促音Qに変化したと考えてみます。

そしてその***Q*** CVは声門閉鎖音のある喉頭化音（CʔV）であったと考えれば、「こそ」「あつて」「せつ」の変化を次のように考えることができるでしょう。

江戸初期　　　　　　　　　　　 江戸中期　　　　　 現在

「こそ」　：kosʔo＝ko***Q***so（coʃso：こそ）----------------------→koso（こそ）

「有って」：atʔe（＝a***Q***te＝aTe：あて）----→aQte（あつて）----→aQte（あって）

「節」　　：setʔu（＝se***Q***tu**＝**seT：せつ）--→seQtsu（せつつ）--→setsu（せつ）

＊「節」の「セ」はse、「ツ」はローマ字tsuで代用。coʃsoはバレトの表記。T：ロドリゲスの詰め字T。Q：現在の促音（/Q/）。***Q***：Qの先祖（山田氏の「促むる音」：第11節参照）。

＊並書表記の뗴は喉頭化音tʔe、쭝はtʔu、単書表記앋は’at（「あつ」）はaQと考えてあります。

このように『日葡辞書』の二つの表記tとtçuをただ一つの詰字ツ（＝T）とみれば、院政末期の『高山寺蔵古往来』にみえる「」（ツの無表記）、江戸初期の『捷解新語』の고쏘（kosso：koʔso）やバレトの重ね子音表記のcoʃso、さらには江戸中期の『重刊改修捷解新語』の「셷즈」（syəit cɨ：seQtsɯ）のツ表記（促音ツの発生）などをうまく説明できるでしょう注69。

ここまでの考察から促音ツ（/Q/）の変化は次のように考えることができるでしょう。

***T***→T（＝***Q***）→Q/tsu

＊***T***：上代の舌内入声、つまり借用元である中古中国語の舌内入声。

＊T：詰字のツ。Q：現在の促音（/Q/）。***Q***：Qの先祖。

1. 上古音再構について思うこと

前節では『日葡辞書』のツがtにもtçuにも表記されている事実を錯視（視線の違い）の譬えを使って考えることで、江戸期のツが詰字のTであることを再発見しました。なにしろ「中古舌内入声はtである」とのカールグレン以来の抜きがたい信念はいまも存在するので、江戸初期の『日葡辞書』にみえるtとtçuの表記をt（[t]）とtçu（[tsɯ]）の2音とみる考えがでてくるのも仕方がないのかもしれません。しかしこのように表記を直截に発音とみることの誤謬は正さなければ日本語の起源に迫ることはできません。

そこで表記を直截に発音とみることにたいして警鐘を鳴らされた橋本氏の言葉を次にみておきます（橋本萬太郎　1981：185－6）。

「（東干語にたいする、ポリバーノフとトルゥベツコイ侯爵との言語学的に興味ある考え方の違いを述べた記述は省略）、もうひとつは、の観察というものは、かんたんに信用するもんではないな、という感慨である。（中略）（趙元任）博士が、（改行）中国語　歳[suei]/ 英語　sway[swei]（改行）の例をとって、通常の音声表記の暗示するところとは、まったく反対に、英語のほうこそ、{s]と{w]のあいだに明確なきれめがあり、中国語の{suei]は、国際音声字母でこう書くのが習慣になっているから、いかにも{s]のあとに母音の{u]がくるようにみえるが、じつは逆で、この[u]は[s]の唇音化（同時調音？）にちかいものであることを、観察し、発表しているから、（以下、略）」

3月にはいって、「戦国出土資料と上古中国語声母研究」（野原氏の博士学位論文：野原　2016）を読みました。その野原氏の論文を読むうちに、中古音、つまりは上古音の再構について思うところがでてきて書きはじめました。そこで上の橋本氏の言葉とともに別建てにして、第13章とすることにしました。

上記論文の「4.3　書母sy-再構　4.3.1　先行研究」の紹介のなかで、野原氏は「近年の上古音研究によって中古音書母sy-は少なくとも5種の上古音声母に由来することが明らかになっている（以下、略）」（野原　2016：131）と述べられています（新派とよばれるBaxter氏などの再構上古音は省略）。しかしこの中古音書母sy-が上古音声母5種にさかのぼるという健気な、古典的な考えを読んで、次の記述を思いだしました（崎山　1978：117－8）。

「ダイエンの音韻対応系列が異なるごとにデムプウォルフによる再構音の変種を際限なく増やしてゆくといった方法論上の傾向は、台湾の諸言語の比較によってその極に達した観がある。（略）しかし、五ないし六の＊Sを立てる次の場合はどうであろうか。（アヤタル語など6種のsの再構の例は略）（筆者補：その後に東京方言の「お嫁さん」と大阪方言の「嫁はん」の例をあげたうえ、「さん」のsと「はん」のhを）原音として区別する必要があるだろうか（略）。」

ところで野原氏は閩語（厦門方言）の「書」が「tsu1」（無気破擦音）、また「試」が「tshi5」（有気破擦音；野原　2016：148）に発音され、そこに無気音と有気音の違いがみられることから、OC（上古音：ここでは戦国時代音）をそれぞれ＊s-taと＊ḷək-s（ḷは無声のlの代用記号：無声側面音＊hlに由来）と再構されています（同書：148）。しかし「書」は魚韻審母ʃɪo、「試」は志韻審母ʃɪei（野原氏の中古再構音はsyoとsyiH）で、中古音は同声母の異韻異声調（平声と去声）です。もちろん中古音が同声母であれば上古音も同声母でなければならないというわけではありませんが、中古音で同じであるsy-を＊s-taと＊ḷək-sのように再構することに問題はないのでしょうか。崎山氏が日本語の「お嫁さん」と「嫁はん」（関西方言）の対応から原始日本語にsとhを再構することに懸念をだされてるように、上古音書母に5種もの声母を再構することに筆者は疑念がわきます。なぜなら野原氏をふくむ‘新派’とよばれる中国語学者は上古音再構のためにカールグレンのローマ字（たとえば中古音書母はʃ、野原氏はsy）を前提としているからです。その前提となっている中古再構音（出発点のローマ字）が間違っていれば、その帰着点である上古再構音もまた間違ったものになるのは当然でしょう注70。

たとえば新派の音韻学者は上古音に牙音Kと喉音Hの2種の声母を再構したり、無声鼻音＊HNや中国語方言には全く存在しない口蓋垂音の＊qを再構しています。原始中国語とオーストロネシア語族が同源であるとみて、そのようなはるか昔々の原始中国語を考えるなら口蓋垂音＊qの再構もありえるかもしれません。しかし上古音（ここでは戦国時代）に口蓋垂音qを再構するならば、わずか3000年という短期間に中国全土（すべての中国語方言）から口蓋垂音qが完全消滅したと考えなければなりません。このようなqの完全消滅が信じられないとすれば、上古音にqを再構することには問題があると考えるのが自然でしょう。

「上古音の研究もまた清朝の考証学者によって大いに進められ、その体系化もほぼ完成していたが、その具体的な音価などは未詳のままでありカールグレンを待たねばならなかった。」（大島　1998：385）との記述がみられます。たとえば「景」（見母梗韻3等kɪɛŋ）と「影」（影母梗韻3等ʔɪɛŋ）が諧声関係にあることから、「景」を＊k-（牙音）、「影」を＊ʔ-（喉音）と再構したことはカールグレンの偉業といっていいかもしれません。しかしこのカールグレンの再構（kとʔ）は清朝の考証学者がすでに知っていた「牙音と喉音はある程度自由に諧声可能」（野原　2016：97）という事実のローマ字化です。しかしこの牙喉音をk系とʔ系の2本立てとみたカールグレンの枠組みを捨てないで、新派が「景」と「影」を＊k-（軟口蓋音）と＊q-（口蓋垂音）、あるいは＊C.q-と＊q-（ただ一つのq；野原　2016：97）と再構するのは、カールグレンのローマ字（k/ʔ）を新たなローマ字（C.q/qなど）へと書きかえただけのものに過ぎないといわなければならないでしょう。

第10節で『切韻』時代の中古入声をとりあえずtʔとしておきました。そこで体系の整合性を考えて、語末子音と語頭子音を同じtʔと考えます。さらに軟口蓋音（牙喉音）の声母と入声にも同じようにkʔ-（声母）と-kʔ（入声）を考えれば、「景」の変化をkʔ（中古）→k（見母）、また「影」の変化をkʔ（中古）→ʔ（影母）と考えることができるでしょう。そこで見母（k）と影母（ʔ）の通用を説明できるkʔ（中古）の先祖X（ある不明の上古音）を考え、Xがkʔに変化したと考えてみます。そこで牙音と喉音の共通先祖であるXに「軟口蓋音kの範囲で」という制約を課せば、X→kʔ（中古）→ʔ（影母）、X→kʔ（中古）→k（見母）のような変化を想定できるでしょう。

ところで中世朝鮮語の合用並書表記にはs系とp系の複子音表記（sC/pC；Cは子音）がみられ注71、現代韓国語ではそれらは次のように各自並書表記になっています（福井　2013：38）。

「s-系　st-　stʌr　「娘」　t’ar[t’al]　（筆者注：stʌr→ttar）

p-系　ps-　psʌr　「米」　s’ar[s’al]　（筆者注：ptʌr→ssar）

＊合用並書表記と各自並書表記：「ᄯᆞᆯ名〈古〉①娘。〈現〉딸」「쌀名米。（略）ᄡᆞᆯ名〈古〉쌀」（天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55：136,301）。

そこでそのs-/p-系複子音が現代済州島方言で激音と濃音のちがいとしてみられることから、あらたにH複子音を考え、H・P・S複子音と方言（陸地方言と済州島方言）の違いを対比してみると、次のようになります。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 激音 | 濃音 |
| 福井氏の分類 | p-系複子音 | s-系複子音 |
| 陸地方言 | － | pt/pc→ʔt/ʔc | ps/psk/pst→ʔs/ʔk/ʔt | sk/st/sp→ʔk/ʔt/ʔp |
| 済州島方言 | pt/pc→th/ch | － |
| 筆者の分類 | H複子音 | P複子音 | S複子音 |

＊福井　2013：75の表4.3から作表。

＊「10.合用並書表記を考える」（～/korean/korean1hp.docx）参照、。

そこでH複子音の変化（pt→ʔt/pt→th）と同じ変化が古代中国語の牙喉音のにもおこっていたと考えれば、中国語牙喉音の上古から中古（現在）への変化を次のように考えることができるでしょう。

上古　　中古　　 ～　　現在

見・影母の通用：X-----→kʔ（喉頭化音）→k（見母）/ʔ（影母）

渓・暁母の通用：X-----→kh（渓母）----→x/h（暁母）

＊X：「軟口蓋音kの範囲で」という制約のあるX。

　　＊kh（渓母）の変化については注72。

そこで「軟口蓋音kの範囲で」という制約を課しながら、ある不明の上古声母Xをさがすことができれば、「OC　＊q-/＊qh-＞MC　ʔ-（影母）/x-（暁母）」（野原　2016：76；新派の潘悟雲説）のようなわずか3000年で完全消滅する口蓋垂音q/qhを再構する必要もなくなるでしょう。

ここで「日本の字音というより、当時の中国の音訳字音というべきもの。」（古屋　2021：54）と考えられる、『倭人伝』の「末盧」の表記注73を考えてみます。

陳寿は「松浦」の「」（matu）を入声の「末」（中古：末韻muat）で写しています。しかし陳寿は「」をmuat（中古音：「末」）ではなく、なぜmuatV（Vはある不明の母音）の漢字で音写できなかったのでしょうか。国語学者はいつもmuatVにピッタリな漢字がなかったためと説明します。しかし日本語よりはるかに豊富な母音をもつ中国語であるなら、「松」（matu）に近い音訳漢字はあったと考えるのが自然ではないでしょうか。それをmuatのような韻尾がtである入声で音写したというのは考えてみれば不思議なことです。
　そこで『倭人伝』当時の入声をtではなく、T（ロドリゲスの詰字ツ）と想定してみます。すると、このロドリゲスの詰字ツ（T）は江戸初期にはtとtçuの二つに分化しているので、倭人伝時代の「松」をmaTであったとみて、そのmaTはその後、maT→matu→matçuと変化したと考えれば、陳寿が「松」（maT）を「末」（muaT）で音訳したことに何の不思議もないでしょう。

ところで亀井氏は『捷解新語』の並書表記「쭈」（ccu）にたいして、次のような考えを述べられています（亀井　昭和59：362）。

「かくみれば、入声音の特殊な注音法「쭈」は、やはり、tから今日行はれる単純な「ツ」に推移するその過程に存した実際の発音の様態を写し伝えてゐるものであらう。」

そこで『捷解新語』の「쭈」（ccu）を濃音のʔcuとみて、その「쭈」を同時代の「詰字のツ」と考えると、そのツは濃音のʔcu、つまり喉頭化音のcʔuと考えることができるでしょう。そして、さらに詰字Tの先祖を***T***と考えれば、***T***→T1（呉音）～T2（漢音）→T3（詰字T注74＝cʔu）→Q/tsu （促音とツ）の変化を考えることができるでしょう。

そこで中国語舌内入声と日本語の舌内入声を次のように対比させることができるでしょう。

　　　　原始　上古　切韻　　　唐代　元・明　 清　　　　　　　現代北方方言

中国語：T0--→***T***---→T1--------→T2-----→ʔ--------------------→φ（消失）

　　　　　　　　　 ↓（呉音）　↓（漢音）

日本語：　　　　　 チ（T1）--→ツ（T2）-----→T3（詰字T：ツ）→Q/tsu（ッ/ツ）

＊***T***：舌音の1種。詰字T：cʔu。
＊チ・ツの変化については前回の更新（～/japanese/japanese1hp.docx）参照。また次回の更新で考えます。

ところで清朝の考証学者があきらかにした「古無輕唇」注75（古屋　2010：16）をうけて、その事実を幫母p/非母fなどとローマ字化したのはカールグレンの偉業です。しかしここまで注意を促してきたように入声をp/t/k、あるいは濁声母をb/d/gなどと認め、上古音に口蓋垂音qなどを考える‘新派’の方法論はカールグレンのローマ字を焼き直し、符牒をつけかえているだけだと気づかなければなりません。

次の言葉を心にきざみ、先に進みましょう（尾崎　昭和55：60）。

「（上略）いずれにせよ、何の説明も伴わない（筆者補：入声韻尾の上古音再構で）-dとか-gとかだけなら、それはたかだか通押の關係を示す符牒というだけ、古人がとうの昔にやったことの記號化というだけのことであって、音韻科學の内部に一歩でも踏み込むものではない。（略）」

＊下線については注76。

さて、このあとも考察は続けたのですが、今回は『切韻』時代の中古入声をT（第10節）、また江戸時代の舌内入声を詰字のT（第12節）と考えたところで中断とします。

補記：ここまで（第12節と2021.3月以降に記述した第13節）が2021.4.7に「暫定版」として更新したものです。その後「補訂版」のために校正などをしているうちに、「14.濁声母の有気音化を考える」について書きたくなり、「14節以下を追加考察します（2021.7　記）」と書いて更新しようと思いました。しかし結局、この「補訂版」でも、以下の「お断り」にあるように第14節以下は更新できませんでした。
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2022.2.25　ichhan

**お断り**

暫定版として更新することにしたため、以下の考察については項目のみ紹介します。

第13節　上古音再構について思うこと

＊3月おわりに急に別建てにして、第13節として本文に組み入れました。

第14節　「셰쭝」と「셷즈」の母音の違いを考える

＊前回の更新（～/japanese/japanese1hp.docx）の第22節「ツの破擦音化はいつ起きたのか」について、さらに考察を続けたもの（2021.2より考察はじめる）。

第15節　『朝鮮版伊路波』の와（ワ）の表記を考える（2021.2下旬より考察はじめる）

なお2021.2.7時点での考察は次のとおり。

第16節　舌内入声字のかな表記を考える

第17節　喉内入声字のかな表記を考える

第18節　上古喉音韻尾の中古音への反映を考える

第19節　梗摂と曽摂の合流について

第20節　橋本氏の喉音韻尾についての考察を考える

第21節　江韻の問題を考える

第22節　上古「侵（談）：蒸中東（陽）」の押韻について

第23節　韻序(韻目順)について考える

＊第16節以降は2020.11月ころまでに記述。第18・22・23節は以前の草稿（「上古中国語喉音韻尾の問題を解く」2013.2頃のもの）をもとに記述。今回は第16-19節（第22節）まで書き続けていたのですが、時間がなく「暫定版」には載せることはできませんでした。

1. おわりに（暫定版）

更新をして半年も過ぎたので、昨年11月すぎたころに上記「お断り」の第17節あたりで考察を一時やめて、更新しようと考えました。しかしその後も考察をつづけたために年末近くになり、このままではとても更新はできないので、注などを除いた第16・17節までを暫定版として更新するというアイディアがわきました。しかしそれでも第20節以降も考えだして年を越してしまい、さらには2月に入って上記の第14・15節の考えがわきました。しかしやはりこのまま考察を続けると春をこえても更新ができないと思うようになり、そこで暫定版として第12節までを校正して更新することにしました。なお第12節の次に第13節として、「ロドリゲスの詰字Tはどんな音だったのか」を書いていたのですが、校正するうちに第12節と第13節をあわせて書きなおし、第12節としてあります。

ところで先日までは第12節までの校正と今回載せなかった注など、さらに（「お断り」の）第14節以降の考察をあわせて載せる予定をしていました。しかし第14節以降の考察は促音（舌内入声）に関する問題とはいえ、撥音に関する問題でもあるので、次回は撥音の問題からはじめようと考えなおしました。
　そこで今回のような時間切れにならないように半年ほどで更新するために、撥音の問題は少しだけ考察し、今回省略した注や資料解説などの校正をして、補訂版として更新しようと思います。

今回は本当にグダグダになってしまい、促音（入声）についての考察も中途半端になってしまいました。更新が非常に遅れたことおわびします。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2021.4.7

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ichhan

　おわりに（補訂版）

　昨年四月に更新してあっというまに一年近くたってしまいました。その間考察は進めていたのですが、今回は前回の更新（～/japanese/japanese2x.docx）の本文をすこし手直しし、本文の「注」のみを追加して更新することにしました。
　上の「おわりに（暫定版）」にもそのいきさつを少し書きましたが、ここで筆者のこの１年の歩みを簡単にまとめておきます。

＊以下の第＊節（節の番号）とは先の13節の最後に書いた「お断り」にみえる第＊節をさします。

2020.11月ころまで

2013.2頃の草稿（「上古中国語喉音韻尾の問題を解く」）を第18/22/23節として改稿する。また第17節あたりまで考察をする。

2021.2～
　　第14/15節の考察をはじめる。

2021.3～

野原将揮氏の早稲田大学博士学位請求論文（「戦国出土資料と上古中国語声母研究」：早稲田大学リポジトリ）を読み感じたことを「暫定版」に13節として追加。

2021.4.7

上の第13節を追加し、「暫定版」（注をのぞいた本文のみ）として更新（～/japanese/japanese2x.docx）。

2021.6～

　「暫定版」に更新できなかった注などを校正するうちに、「濁声母の弱化（有気音化）」の問題を書きたくなり、考察をはじめる。

2021.7～

森博氏の「日本書紀歌謡α群原音依拠説」をめぐる平山氏との論争について書きはじめる。次々回の更新に載せる予定。

2021.11.22～

＊馬之濤氏の早稲田大学博士学位請求論文（「明代中国史料による室町時代の音韻についての研究ー『日本国考略』を中心にー」：早稲田大学リポジトリ）を読み、『日本国考略』の「寄語」の解読をはじめる。

2022.2.25

＊2021.4.7に更新した「暫定版」（本文のみ）に「注」を追加し、「補訂版」として更新（～/japanese/japanese2hp. docx）。

　次回は「補訂版」にのせられなかった16～18節をできるだけ早く更新したいと思っています。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2022.2.25

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ichhan

【注】

1. 「5）　宋音†：鎌倉時代（筆者注：1185年頃 －1333年）に，臨済宗や曹洞宗の禅僧などによって伝えられた宋から元初（10-13世紀）の江南地方の字音。たとえば，「行燈」アンドン」（略）kitamura1071

6）　唐音†：江戸時代に，黄檗僧や長崎の通事，あきんどなどによって伝えられた明から清初（14～18世紀）の南京官話および杭州官話系の字音。たとえば，「行」ハン，ヒン」（中国語学研究会編　昭和45：121－2）。あわせて（）。いま。

1. 「呉音、漢音、唐音としては正しくないが、わが国でひろく一般的に使われている漢字の音。たとえば、「消耗」の「耗（コウ）」を「もう」、（略）「立案」の「立（りゅう＝りふ）」を「りつ」、「雑誌」の「雑（ぞう＝ざふ）」を「ざつ」と読むなど。慣用読み。」（日本大辞典刊行会編　昭和48：5巻444）。
2. 「結局、「重箱読み」（筆者注：音＋訓よみ）の語が一般的になったのは明治もなかばを過ぎてからであり、さらにこれと「湯桶読み」（筆者注：訓＋音よみ）との現在のような使い分けが明確に行われる（あるいは認識される）ようになったのは昭和に入ってからのようである。（以下、略）」（　昭和62：328）。
3. 「（上略）ここ（筆者注：止摂開口）の精組字は、後続の舌面母音[i]を、調音位置が摩擦音[s]と同じ舌尖前母音[ɿ]に変えたのである。南宋時代の代表的な韻図である『切韻指掌図』（筆者注：1176～1203年成か？）はこの母音の存在をはっきり示しており、北宋時代の『皇極経世声音唱和図』（筆者注：邵雍作1011～77年在）の言語にもこの母音があった可能性が指摘されている。そして元代の『中原音韻』（筆者注：周徳清1324年）は、はじめて舌尖前母音・舌尖後母音（筆者注：ɿ/ʅ）韻母だけからなる韻を、支思韻という名で独立させたのである。『西儒耳目資』では、この舌尖前母音をローマ字でůと表記している。」（佐藤昭　2002：80）。
　＊ůはuに黒小点の代用記号。
4. 「（上略）その外には下に「子」字を加へて名詞を構成するもあり。（略）

「シ」とよむもの、これらは平安朝以前に生じたるものなり。

　　　　（引用は5語のみ）

「ス」とよむもの、これは唐音の時代に成りたるものなり。

金子　銀子　樣子　　扇子（略）

「ツ」とよむもの、これらは「ス」といふよりも一層新しきものなり。

（俗に段通と書く）　（以下、略）」（山田　昭和33：234-5）。

1. 表（『下學集』）の左より、天文23年本（巻之下　器財門第十三）・永祿2年本（巻之下　器財門）・黒川本（巻之下　器財門四）にみえる「脚蹈・楪子」の仮名（東京大學國語研究室編　昭和63：79/82,231/235,389/391）。
2. 「天文元年（一五三二）、僧某が『』（筆者注：行誉著1445-6年刊）に『』（筆者注：著者不明、1274-81年ころ成）から抜萃した二〇一箇条を添え、あわせて七三七条を二〇卷としたものである。」（浜田・佐竹編　昭和46：解題14）。

　もとの『壒嚢鈔』（7巻(3)4段）の記述は「四　ツス。チヤツナントヽ云字ハ何ソ」（上書：565）。

1. 索引篇に「チヤツ〔楪・楪子〕（略）チヤウママ撮壤一一六3→テフツ」/「テフツ〔楪子〕→チヤツ」（中田・根上　昭和46：索引篇250,269）。
2. 「享保二年（筆者注：1717年）版本などの題簽には「増補合類大節用集」（略）」（中田・小林　昭和48：影印篇解説10）。影印書名は「増補合類大節用集　乾坤」」（同書：影印篇3）。
3. デジタルコレクションの「脚踏・楪子」は『禪林象器箋』（無著道忠編　明治42：812,827）により。
4. 『頓要集』（建仁寺の僧か、1444年成）：「」（中田・根上　昭和46：影印篇506左24－8）。『』（室町時代後期、一条兼良著）と『饅頭屋本節用集』（16世紀末刊？）には「」、『』（南北朝時代）には「」（山田　昭和33：170,170,171）とあり。『和漢三才図会』には「楪子・脚達」の絵あり（和漢三才圖會刊行委員会編集　昭和45：386,399）。

また「付録 1　唐音一覧（呉音・漢音対照）」には、『伊京集』（古本節用集の一種で、室町末期の筆写）/『明応五年本節用集』（1496年）/『天正十八年本節用集』（1590年）/『饅頭屋本節用集』（1596～1615頃刊）/『黒本本節用集』（室町末期書写）/『易林本節用集』（1597年刊行）のすべての書に「・」・（:△印）」（藤原　昭和63：335,337）あり。
　＊上の△印：「あて字等、元来の語形・字形と異なるものである。」（同書：334）。

1. 「（上略）江戸時代に至り，本居宣長はこれを「一種の漢音」原注13）とし，後に，橋本進吉博士の「（普通の漢音に対する）一種の漢音」原注14），有坂秀世博士の「天台漢音」原注15）という取扱いを経て，最終的に飯田利行博士の「新漢音」という名称が今日普及し，漢字音の系統の取立てが行われるに至っている原注16）。（略）全て密教に伴って請来された儀軌の中の声明としての直読資料のみである。」（沼本　2005：196）。
2. 「八　勝（略）新漢音シ、唐音シン。この現象（筆者注：「勝」（證韻l*ɪ*əp）などの喉内撥音韻尾の脱落）は前に擧げた證・稱・乘字と同じである。但し前者に於いては、既に宋音よりシンとなつてゐることである。（略）」（飯田　1990：135-6）。
3. 『唐五代西北方音』（國立中央研究院歴史語言研究所　單刊甲種之十二：羅常培著　民国22年上海刊）。　＊影印本は（株）大安（東京：1963年発行）。

『現代呉語之研究』（趙元任著　大華印書館　民国57年発行）。

1. 「満田博士のお説」：『中国音韻史論考』（満田新造博士遺著刊行会編　満田新造　1964　武蔵野書院）にみえる下記の考え。

「古代支那語の入聲韻尾p，t，kは、元・明頃の北京官話では、既に聲門閉鎖音（筆者注：滿田氏は「無尾入聲」）に變化して居り、その後つひに全く消失するに至つたものであるといふ。」（有坂氏によるまとめ；有坂　昭和32：601）。
　また有坂氏は入声韻尾の「微弱化の或部分は、支那原音に於て既に起つてゐたものに相違無い。當時、入聲韻尾の三内（筆者注：唇内p・舌内t・喉内k）の別は勿論儼存したが、その響は餘程微弱なものであり、即ち、結局、大體に於てやはり現代の臺灣音に於ける状態（筆者補：「つまり、「短促」と言つても、國語の促音などのやうに「急に」のではない。寧ろ、「急に」といふ感じである。（略）」（同書：603））に近いものではなかつたらうかと思はれる。」（同書：603）とみられました。

そこで中国語北方方言（北京方言など）の入声は声門閉鎖音の状態を経過していた（p/t/k→ʔ→φ）と考えられ、また上古中国語の入声韻尾は現代粤語（広東語など）にp，t，kとして残存しているとみられています。このように入声韻尾がp/t/k（上古）→ʔ（元明以前の北方方言）→X（臺灣音の「急に」音）→φ（現代北京語）と変化したとみる考えがでてくるでしょう。そこで疑問がわきます。この変化にみられる声門閉鎖音と「餘程微弱な急に消える音」は同じだったのでしょうか、それとも似て非なるものだったのでしょうか。上の二音を同じ（「ʔ＝X」）とみれば、このXは声門閉鎖音であり、声門閉鎖音が「急に」とみるのはおかしいでしょう。また同音でない（「ʔ≠X」）とするなら、Xは声門閉鎖音ではない、「急に」音と考えられますが、ではその「急に」音とはどんな音だったのでしょうか。上の疑問をこのように考えるのは言葉遊びのようにみえますが、そうではありません。なぜなら上古中国語の入声韻尾をp，t，kとみるカールグレンの考え方に問題があるからです。もし上古中国語の入声韻尾をP,T,K（いま仮に大文字）とみて、P,T,K→p/t/k（→p/t/k：粤語などの内破音）、P,T,K→p/t/k→ʔ→φ（北方方言：北京官話など）、P,T,K→p/t/k→X（臺灣音の「急に」）のような変化を考えることで上古中国語から現代各方言の入声韻尾の変化をうまく説明できるからです。考えるべき問題は多く残されています。

1. 「周氏が「皇極經世圖聲音圖解」の章において推定したごとく、邵雍のころ即ち北宋初期において -t,k-ママの韻尾子音はもはや失われて、聲門閉鎖音ʔとなっていたと考える外はあるまい。つまり三内の韻尾の中で -pの子音のみがなお獨立して存在していたのである。」（小川　昭和52：134－5）。

＊周氏：「宋代汴洛語音考」の著者、周祖謨氏。
＊邵雍：「皇極經世書聲音倡和圖」の著者、1011－1077生存。

1. 『九条家本法華経音』は未見のため、貞享4年版（1687年刊）の『備忘記』（上野編　平成28：36）より引用。

＊『法華経音義』（明覺三藏流）には「（略）入聲ノ輕他/カナヲスルヲ以テ入聲トハ知ヘシ（改行）文字ノ終フツクチキアリ（改行）（フ入聲）入聲ヲ平聲ニヨム」（古典研究會出版　昭和55：310）。

1. 「（フ入聲は略）又、文字の上邊中央に點を附けたものは、毘富羅聲といひ、上聲と同じく高く唱へるが、これは眞言宗では用ひず、天台法相にのみあると傳へられてゐる。多分上聲の重の名残であらう。かやうにして實際は六聲であるが、圖には八聲を區別してゐる。（八聲圖は略）」（橋本進吉　1950：312）。
2. 「早い時代に在っては、この声点を文章で表現して特に名称が与えられず、鎌倉末期乃至南北朝期以後「フ入声」が現われ、更に「不入声」が使われるようになるのは、江戸期に入ってからのようである。」（沼本　1974：17）。
3. 「（改行：本文の引用につづいて）草稿本教行信証には、入声音でない漢字に、入声点「〇〇」（この資料では唇内・喉内入声の清音の符号）を差した例がある。

　　大宝〇〇〇海（巻一）　了〇〇一悟 （巻一）

「宝」「了」共に効摂の漢字で[u]尾音が「ウ」で表記される字であつて、これに唇内入声清音を示す声点があるのは、唇内入声音に平声音を差すのと表裏の関係にあり、両字が同じ音に解されていたことを反映する。類例は、院政期にもある。

〇群寮〇（興福寺蔵大慈恩寺三蔵法師伝巻一）

春秋〇〇（高山寺蔵古往来）

この節の冒頭に引いた「真俗交談記」の「法」と「宝」を当時通用させた記事は、右（筆者注：上）に述べたような国語史上の現象を背景に持つものであつたのである。」（小林　昭和44：59）。

1. 本文の「概要」（『国語学』25緝：1956.7）以下の引用で筆者が下線をひいた記述は「促音と撥音（上）」（大阪市立大学紀要『人文研究』（1巻1号；1950a）に発表された濱田氏の考えをさします。本来ならば濱田氏の論文→小松氏の批判（本文の「概要」以下）の順に紹介するべきものですが、考察の都合上、紹介の順序が逆になっています。濱田氏の上の考えは第8節で紹介します。
2. 博士家訓点資料（小松　1956：71-3）より唇内入声字の例をいくらかあげておきます。

「a.「接」：（3）　の拠リにスル（同巻四十；筆者注：『図書寮本群書治要』）

　b.「摂」：（3）　陛下前に始（め）テ位をシ（群書治要巻二四）

　c.「揖」：（1）　席ヲテシテ曰（く）（観智院本世俗諺文）

　d.「蟄」：（1）　昆虫未（た）。（せ）〔未〕（群書物ママ要巻七）

8．（3）「颯」：　颯-々（と）スゝシクシテ（醍醐寺本遊仙窟）

　（4）「颯」：　（と）スゝシウシテ（真福寺本遊仙窟）
　　　の（筆者補：上の）ふたつは「共に文選読みで「と」を補読すべきであろうが、（略）」

＊『群書治要』唐代初期の631年の治世のための参考書（魏徴編50巻）。
＊：「漢文訓読の一方法。一つの語をまず音読し、さらに同じ語の訓を重ねていう読み方。たとえば「細細腰支」という一句を「細細（さいさい）とほそやかなる腰支（ようし）のこし」と読む類。（略）」（日本大辞典刊行会編　昭和51：19巻400）。

1. 「」（合韻səp）についての原注23：「もし漢語起源であるとするならば、まだ平安朝においてはこの種の促音化（筆者注：唇内入声字「」が「サツ」で表記されるなど）が起きていないはずであるから、仮名文学の作品中（筆者注：たとえば「えもいはぬにほひのかほりたるこそおかしけれ（徒然草一〇五段）」（小松　1956：73））に「さふと」の形で表記されていなければならないのにそれが見当らないため、国語の擬態語であることは疑いを容れない。（略）」（同書：78）。

さてそうすると、日本語の擬態語「サ」が「サツ（と）」に、また漢語の「颯」（səp）も「サフ」から「サツ」へと変化したことになりますが、この両変化の符合はどう考えればよいのでしょうか。それとも漢語「颯」の変化をsəp→satsu（「サフ」→「サツ」）と考えることに問題があるのでしょうか。おおいに問題となるでしょう。

1. 「a、平安末期までは、＝フ＞＝ウの動揺だけで、特別なが存在した形跡は認められない（原注16）。

b、鎌倉初期になると、、上にくる唇内入声字（原注17）が促音化を起し、「ツ」表記される例があらわれる。

c、鎌倉末期から南北朝にかけて、この促音化の傾向は更に進行し、一部の文字においては促音記号としての「ツ」がついに舌内入声の-tと混同され、それが正式の読書音の位置をうばうに至る。

d、しかしながら、この現象は決して唇内入声音の一般的変化ではなく、特定の文字にのみ、特定の理由によって起ったものであるから、別種の字音体系との交渉の結果と解するのは妥当ではない。」（小松　1956：70）。

1. 『法華経音訓』（室町初期の天台僧心空撰）の単字に「及ギフギツ、汲ギフギツ、拾ジフジツ、十ジフジツ、立リフリツ（緝韻）、答タフタツ、合ガフガツ（合韻）、業ゴフゴツ（業韻）（改行）の如く、本来の「－フ」表記と共に促音化した「－ツ」の形が併記されているのである。（改行）「補忘記」「法華経音義補闕」（注28参照）では「フ入声」対「ツ入声」という把握が成立していた事が明らかである。」（沼本　1974：17）。
2. 大東急記念文庫蔵法華経巻八（24－120－892）にみえる「十」「法」の上接字と下接字との関係は次のようになっています（上書：4,5）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 唇内入声字 | 十（禪母緝韻ʒɪĕp） | 法（非母乏韻fïɔp） |
| 上接字 | 下接字が無声子音 | 十方入 | 法入華 |
| 下接字が有声子音 | 二十五フ | 法フ座 |
| 下接字 | 合フ十 | 説法フ |

 　＊声点記号は省略。代わりに入声は入、フ入声はフのように示した。

1. 「　色葉字類抄（筆者注：橘忠兼編、平安時代末成立）には「獨立」「混雜」はそれぞれ「トクリフ」、「コンサフ」と註してゐるが「確執」は「カクシツ」「クワクシウ」兩樣の註が見えてゐる。」（濱田　1950a：113）。
2. 日遠（1572～1642）の『法華経随音句』（1620成、1643年刊）を＊「法華経音義補闕」は：日遠の『法華経随音句』（1572～1642：1643年刊）を日相（1635～1718）が補闕した『法華経音義補闕』に「（上略）総メ入声字上ニ有ル時ハツメテヨム習ナリ。法華・性・掌（略）等是ナリ。又入声上ニアレトモ（筆者注：トモは合字）連声シテツメラレサル事アリ。語・談・力（略）等・是レ入声ノ格外ナリ。一字ニツムルトヒクトノ二声アルハ、フツ入声ノ字ナリ（原注94）」（沼本　1974：12）。
3. 小松氏が唇内入声字のへの変化をΦu→促音化（ツ表記）と考えられることにたいして、沼本氏は「（略）少くとも、〔-〕〔-U〕では、これと対立する形で、促音〔-Q〕が存在する事になっていた事は確実である。」（沼本　1974：14）とみられ、Φu（フ入声）がウ音化、同時にΦuが促音化するとみられた小松氏の考えを否定されました。

ハ行転呼音の変化はpV→ΦV→wV（通説）とみられていますが、筆者の新説は「ハ行音の変化を考えなおす」（HP「日本語の起源」：～/haline/hagyouon1hp.docx）の注29と30、また無声化については注31を参照ください。

1. 「（略）「校」の如き喉内のものにあつては、下部要素がやはりカ行音ではじまる「校」の如き文字の場合に限つて「ガッコウ」の如く促音化するもので、（中略）gaku-kauの如き同一淸子音kの間に挟まれた狭母音uがまづ無聲化し、ついで脱落したことによるものであつて、この場合もむしろ古くはカウであつたと考ふべきものと思はれる原注。以下、舌内入声は略」（濱田　1950:101）。
2. 「　但しイチコウ（高)カツシカ（飾）の如き固有名詞に見える例外もないではない。」（濱田　1950a：113）。「一」「葛」は入声質韻（i*e*t）、曷韻（at）。
3. 「一字ニツムルトヒクトノ二声アルハ、フツ入声ノ字ナリ」（注28参照）と記述した日相は唇内入声字の促音化を入声の範疇で、それにたいして「」（「六」：喉内入声屋韻3等ɪuk）にたいしては連声としてとらえていたと沼本氏は考えられました。そして唇内入声が促音化し、喉内入声が連声とみられた違いについて、「喉内入声字については、この様な支えが存在しなかった――日相・日遠は単に「連声」と把握していた――。そこに舌内入声への誤認の有無の大きな一方の原因が有ったと考える（原注47）。」（沼本　1974：20）とされました。　しかし舌内入声と唇内入声を入声の促音化（「」と「」）とみながら、喉内入声の「」を連声とみて、舌内・唇内入声と喉内入声を切り離してしまう考えは江戸初期でも舌内入声の「雪」（薛韻iuɛt）と「隠」（隠韻ïən）とが結合した「」（「Xecchin/Xetchin」；土井・森田・長南編訳　1980：743,756）が連声とみられていた事実を無視することになるでしょう。外山　昭和47：229-234,265-8の「連声」の項、参照）。
4. 「（上略）[]式の発音（筆者注：下注）は江戸時代に入って後に新に生じたものではなくして、世阿弥時代からすでに存したものと言えるようである。しかして謡本ではない『花習内抜書』のごときものにも入声ツが特別に取扱われている点から言えば、それは謡の謡い方においてのみ行われたのではなくして当時の普通の言葉でもそうだったのではないかと考えられる。しかして一般の人は、仮名の遣い方としては、入声ツの音を普通のツの音と同じように表記して省みなかったのであるが、音声方面を内省する事の多い能楽者が、その異なった音（筆者注：入声のツと普通のツ）を区別して表記しようとし、謡本にのみ止らず、普通の著述にもこれを及ぼしたと考えて、さほど不自然ではないと思われる。」（岩淵　昭和52：222）。

＊橋本氏は上の[]を「軟口葢を上げて咽頭壁に密着せしめて閉鎖を作り、之を破つて氣息を鼻腔へ出す時に發する音」（鼻的破裂音；橋本進吉　昭和36：262）とされています。

＊なお、謡曲の「む」の発音については「6.謡曲におけるツの発音について/7.平曲・御文や声明のノムの発音について」（～/korean/korean3hp.docx）参照。また「21.世阿弥の小書きの「ッ」について考える」（～/japanese/japanese1hp.docx）参照。

1. 「《促音符としてのツ》　漢字音のt入声には「ツ」が借用されたが、和語の促音に「ツ」を用いるのは院政期の点本から散見し、鎌倉後期に定着し始めた。それ以前は無表記が多く、資料によっては「*ン*（ン）」を用いた。」（小林　昭和44：52）。
2. 漢語ママの入声：「（4）　漢語の入声/-p/,/-t/,/-k/は，‘フ・ツ・ク・チ・キ’に訳されることは，呉音とほぼ同様である。ただし、/-k/の場合は，/-ŋ/の場合に併行して，‘キ’または‘ク’のどちらかに一定して訳される。（略）」（藤堂　1980：171）。
3. 「この本（筆者注：『漢書楊雄伝』）では撥音はm nの区別なく共に一様にムで表わしてありますから、（略）」（岩淵　昭和52：240）。たとえば、「…　巖突（筆者注：これはルビ）　（筆者注：舌内入声t：術韻）●…」（吉澤　昭和6：215）。

＊●は「人」（ひとかしら）に「㣺」（したごころ）の字。

1. 「『楊雄伝』から五十四年ばかり後の石山寺蔵の『法華義疏』（一条天皇の長保四年〔一〇〇二年〕加点）でも、入声のp・kに対してはフ・クを用いて居りますが、tに対しては撥音を表わす符号と同じものをもって表記して居ります。（略）」（岩淵　昭和52：240）。
2. 『金光明最勝王経音義』（1079年）にみられる入声の表記には次のような違いがみられます（上書：131-2）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 万葉仮名表記 | 同音字表記 |
| 唇内入声p | 臘良布反 | 吸急反 |
| 舌内入声t | なし | 潔結反・蛭七反 |
| 喉内入声k | 博八久反・激下伎反 | 馥福反 |

そこで「『漢書楊雄伝』の場合などと考え合わせて、入声tの発音は現在のごとくツの仮名の音で発音されたのではなく、中国語の原音に近い発音であったので、その結果その音を正しく表わすような仮名がなく、ためにかかる特殊の方法（筆者注：上表の同音字表記）によって表記するに至ったものと解せられる。（以下、略）」（同書：132）。

1. 「鴨長明の『無明抄』に（改行）はねたる文字、入声の文字の、かきにくきなどをば、みなすててかくなり。万葉集には、新羅をばしらとかけり。古今序には喜撰をばきせとかく。これらみなその証なり。（『新校群書類従』巻二九四）」（上書：59）。
2. 『松浦の能』（世阿弥1427年）には「ジセッモ」（「時節も」；上書：60）がみられる。
3. 「」と「」のように無気音（精母葉韻tsiɛp）と有気音（清母葉韻：tshiɛp）の違いが促音化とウ音化の違いになっているものもあります。そしてその違いにたいして、「後者（筆者注：妾）が常に体言的に用いられ、従って、「に」や「を」などの助詞に接続する場合が非常に多く、そのため促音化の機会がなく、国語と同様な変化を順当に受けて長音化することができたと考えられる。（略）」（小松　1956：75）と小松氏はみられています。
4. 「漢字を偏または旁（つくり）から類推して、我流に読むこと。「垂涎（すいぜん）」を「すいえん」、「洗滌（せんでき）」を「せんじょう」、「絢爛（けんらん）」を「じゅんらん」と読む類。」（日本大辞典刊行会　昭和50：17巻123）。
5. 中国語「榻」は「狭い寝台」（愛知大学中日大辞典編纂処編　1968：1376）。

日本語「」は「①（略）または（筆者補：の）乗り降りの踏み台とするもの。（略）②腰かけ。ねだい。（略）」（日本大辞典刊行会編　昭和49：9巻497）。『日葡辞書』には「Axitcugui.アシツギ（足継）（略）▶Qiatat.」「Xigi.シヂ（榻）」（土井・森田・長南編訳　1980：42,764）。

1. 濁声母弱化：「唐代西北方音の特徴の一として，濁声母（有声語頭子音）が次第に弱化して清声母と区別がないようになることが指摘されている。」（水谷　昭和42：108）。
2. 「脚踏」と「脚榻」の語末は詰字Tにかえ、kyathəT/kyathaTとしてあります。
　このTについては第12節。前回の「11．中古舌内入声はtではない」（～/japanese/japanese1hp.docx）参照。
3. 「1） 1等重韻の合流。（略）東一・冬（通摂），咍・灰・泰（蟹摂），覃・談（咸摂）がそれである。これらは『慧琳音義』（筆者注：『一切経音義』慧琳撰述787～807年）の反切下字では区別されていないので，それぞれ一つに合していたものと認められる。」（平山　昭和42：159）。普通話では「踏」と「榻」は同音tà。
　そこで「踏」（透母合韻thəp）が「榻」（透母盍韻thap）に合流したと考えれば、（kyathəp→）kyatəʔ（「脚踏」）から（kyathap→）kyataʔ（「脚榻」）への表記の変更を説明できるでしょう。
4. 室町時代の「榻」（thaT）は江戸中期に開音節化されtatsuになっていたとみられます。しかしそれ以前に舌内入声の「達」（定母曷韻dat）はtatsuになっていたと考えられます。そこで「」がkyatatsuと発音されるようになったことで、「榻」と同音である「達」（「足が達する」の意）を使った当て字「脚達」に表記が変えられたのでしょう。そしてその後、大工仕事などで使用される現代の「足の立つ」用具（脚立）が普及するようになり、訓読みの「立」を使った「脚立」の表記に変わったと考えることができるでしょう。
5. 「日本語には兩者ともに現われるが，「あッ」[aʔ]というときには特に強い聲門内破音で止められる。（略）」（服部　1951：28）。

上の兩者とは「ゆるやかな声立て」と「はっきりした声立て」をさす。「声立て」「声止め」については、「5．初声喉音字を考える」（～/korean/korean1hp.docx）。また「8．中古音と朝鮮漢字音の入声について考える」（～/korean/korean2hp.docx）参照。

1. 「これ（本文の服部説）に関しては，村田忠男（1993）が東京大学医学部の廣瀬肇氏の次のような談話を紹介している。

「（閉鎖音の場合も含め）促音の時に喉頭の緊張は一切ありません。従来その説の提唱者は内省でそう感じられたのでしょう」」（高山倫明　2012：144-5）。

1. 喉頭化無気音（Cʔ）と無声有気音（Ch）の音韻的対立を最初に報告されたのは奄美喜界島方言を母語とする岩倉市郎氏です（岩倉　昭和16:(2)）。八重山石垣方言の語頭促音と喉頭化母音の例：「[ʃʃiɴ]（知っている）」と「[ʔiʃi]（石）」（中本　1976：222,222）。
2. 与那国島方言の語頭には「[t‘a]（田）/[da]（家）/[ta]（舌）」（橋本萬太郎　1981：346）のような有気音（tha）と有声音（da）と無気喉頭化音（tʔ：「[tʔa:]（舌）」（中本　1976：192））の3項対立がみられます。そこで柴田氏はその喉頭化音は「C1VC2-＞C2’-　ただしC1＝無声破裂（破擦）音　V＝i,u　 C2＝t,k（改行）のような変化によって生まれた。「舌」のt’aはcitaから,「ふた」のt’aはputaからの変化であろう。（略）」（柴田　1988：415）とみられました。すると「舌」（いま仮にsita）はsita→Qta、そして「（上略）やがて与那国島の[tʔa]にいたる。」（橋本萬太郎　1981：357）と考えることができるでしょう（橋本氏が上略中で引用されている八重山方言の語例は宮良　昭和56：275から引用したと思われます）。
　そこで宮良氏がそのsitaから変化した喉頭化音tʔaを「与那国島方言に於ける語頭促音は甚だ特徴に富むものである。その種類を挙げると（改行）[tt-]　[tts-]　[dd-]　[kk-]　[gg-]（改行）などで，そしてその多くは頭音節の脱落によって生ずることが多い。（略）」（宮良　昭和57：154）として、喉頭化子音（Cʔ-）と語頭促音（QC-、宮良氏のCC-）の違いを認識していなかったと、上村氏は次のように解説されています（幸雄　昭和57：解題15）。

「（略）ただし，「語頭促音」プラス破裂音（筆者注：QC）という音声と語頭の喉頭化無気破裂音（筆者注：Cʔ）とは音声的に非常に類似しており、かつ歴史的には前者から後者への移行関係（筆者注：簡略にQC→Cʔ）がみとめられるから、音韻的に有意味な喉頭化音や喉頭破裂音をもっていない石垣島の方言を母語とする（筆写中：宮良）當壯が両者を正しく区別しえなかったとしても，とくに不思議とはおもわれない。（略）」

＊「14.喉頭化音（Cʔ）と有気音（Ch）の関係を考える」（～/kaline/kaline1.html）。また「4．琉球方言にみられる無気喉頭化音について」（～/kaline/kaline2.html）参照。

1. 「tçuqui（月）/catçu（勝つ）」（土井訳注　昭和30：319,46）。博多方言では「Xŏguachi（正月）をXŏbachi（しゃうばち）などといひ、（略）」（同書：611）。また『日葡辞書』では、「Xŏguachi.シャゥグヮチ（正月）」「Xŏguat.シャゥグヮ***ッ***（正月）」（土井・森田・長南編訳　1980：791,791）。
2. 院政時代の悉曇学者明覚の『反音作法』（1093年作、1095年写）に「「終ニフツクチキ有ヲ云レ入ト。」とありますから、このころには入声の表記法もほぼ現在のように一定して来たのではないかと思われます。（略）」（岩淵　昭和52：241）。

しかし第7節で舌内入声の変化をみたように院政時代に舌内入声の表記がツ（チ）に固定化したとするなら、『反音作法』より150年ばかり前の『漢書楊雄伝』のム表記、また100年ばかり前の『石山寺藏法華義疏』の發音符号、さらにキリシタン宣教師ロドリゲスが詰め字Tと述べた舌内入声の変化（簡略にム→ツ→T）との整合性はどのように考えればよいのでしょうか。このような事実（残された文献にみえる表記）を勘案すれば、舌内入声が古代以来tであったとはとても考えられなくなるでしょう。そうであるなら舌内入声tの変化をt（上古・中世）→促音/ツと考えるより、T（上古）→T1（古代：入声移入時）→T2（中世：ム表記）→T3（江戸初期：詰め字T）→Q（現在：促音/ツ）のような変化を考えるほうがより理にかなっているでしょう。
「6.「松浦」はなぜ「末盧」と音訳されたのか」（～/japanese/japanese1.docx）。またその注22,64参照。

1. 『訓民正音』（解例本）では、「「彆」は実際の漢字音は「별」（筆者注：pyər）であったと推測されるが、『訓民正音』で볃（筆者注：pyət）と発音すべきであるとしているのは、そのためである。（以下、略）」（趙訳注　2010：87）。

＊金　2003：147より下表を作成。・印は傍点（去声）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 「質」（質韻3等：ｔʃɪět） | 『洪武正韻譯訓』 | 『東国正韻』 | 六祖 |
| 1455年刊 | 1448年刊 | 1496年刊 |
| ・（北方音：ciʔ) | ・（cirʔ） | ・질（cir) |
| ・짇（南方音：cit) | － | － |

＊は「ᄌ＋ᅵ＋ᇹ」の合字。は「ᄌ＋ᅵ＋ᇙ」の合字。
＊「この中国漢字音‘・짇/・’と朝鮮漢字音‘・질’間の差異を縮める折衷式の統一音として『東國正韻』では‘・’を書いているのである。」（金　2003：147）。

1. 原文は「又於質勿諸韻、以影補來（原注2）、因俗歸正、舊習譌謬、至是而悉革矣」（趙訳注　2010：182）。

「23）　以影補来：（上略）これは，15世紀の韓国漢字音では，-tの入声音がすべて-lで発音されていたから，-tと-lを折衷してㆆ（ʔ）音を利用してㄹ（l）音の弛緩性を補おうとした試みの結果である。このような努力をこの序文では「因俗帰正」と表現した。」（　1993：203）。

1. 「（略）そして，その人為性のゆえに，東国正韻の漢字音は漢字音の歴史的研究において，より重要な伝来漢字音に比べて、資料性において劣るものとみなされてきた。筆者も漢字音の歴史的な研究という意味では，これは当然であると考える。」（福井　2013：79）。また、「さらに漢字音として，東国正韻式漢字音を廃止して伝来の現実漢字音を採用している点で（筆者補：1496年刊の『六祖法寶檀經諺解』は）重要な資料となる。」（同書：243－4）
2. 『洪武正韻譯訓』：「世宗の命を受け申叔舟らが編纂した韻書。明の韻書『洪武正韻』（1375）をハングルによって注音したものである。」（福井　2013：233）。

なお崔世珍著の『四声通解』（1517年）に収録されている『四声通攷』凡例（現存せず）には、「（上略）この『訳訓』（筆者注：『洪武正韻訳訓』）の諸韻において，俗音終声は喉音全清音（字）であるㆆ[ʔ]で表わし，薬韻は唇軽音全清音（字）であるㅸ[f]で表わして，これらを区別した。」（　1993：225）との記述がみられます。
　そこで喉内入声の薬韻（中古：ɪak/ɪuak；藤堂・小林　昭和46：86/88）以外の入声韻尾（俗音終声）は声門閉鎖音（ʔ）であったことがわかります。

1. ㄹ（l：翻字r）：「（2）流音〈ㄹ〉[ɾ、ɭ]（中略）語末では、そり舌音[ɭ]で、舌先の裏の部分を上顎の歯茎と硬口蓋の境目に付けて発音（例：물[muɭ]「水」）（第4課参照）します。」（羅聖淑　2008：9）。ɭ：有声そり舌側面接近音（/ɭ/）。
2. 『洪武正韻』と『東国正韻』の入声（ʔとlʔ）の食い違いについて（注57参照）
「中国の北方音では入声韻尾は唐、五代に弱化し始め、十四世紀に声門閉鎖音（ʔ）になったので（略）」（李　1975：108）とみられていて（第4節参照）、中国の韻書『洪武正韻』を諺訳した『洪武正韻譯訓』では入声「質」の北方音は「ciʔ」（金　2003：147）とされています。そこで唐代に借入された舌内入声tはその当時までに声門閉鎖音（/ʔ/）のあるlʔに変化し、15世紀（『訓民正音』）にはlに変化していたと考えます。。そしてその当時、舌内入声はlʔ→lへの過渡期で、lの先祖であるlʔの記憶が当時の学者に生々しく生きていたとみれば、あるべき舌内入声のtや現実の入声のlではなく（『訓民正音』では「音をもつ「彆」の字は、終声にᄃを用いるべきなのに、朝鮮ではᄅと読み習わしている。」（趙訳注　2010：86）と規定）、lʔであると規定しなおした（「因俗歸正」）のが韻書『東国正韻』であると考えることができるでしょう。このように考えれば、『訓民正音』の入声がㄹ（l）であるのに、同時代の『東国正韻』が「ㅭ」（lʔ）としていることに矛盾はないでしょう。

そこで入声（終声）の変化をt→lとみて、t（中古）→lʔ（東国正韻）→l（六祖）の変化を考えるより、切韻時代の入声をtʔと考え、tʔ→lʔ→lの変化を考えるほうがより説明は楽になるでしょう。しかし現在の語末のㄹはlではなくそり舌のɭ（注58参照）なので、中古入声tʔがɭʔに変化（tʔ→ɭʔ→ɭ）したのはなぜかという疑問を説明するためには、T→ɭʔ→ɭ（『六祖』以後）ような変化を考え、ɭʔへの変化を説明できる、ある不明の舌音X（＝T）を探すことが必要となるでしょう（注53参照）。

＊「母音イとウの相関について考える」（～/japanese/japanese1hp.docx）の「6.「松浦」はなぜ「末盧」と音訳されたのか」参照。

1. 刊行時期については「五、成立の時期」（森田　昭和48：221-4,266）。
2. 『捷解新語』（京大國語國文研編　昭和47：11,11,349）と『日葡辞書』（土井・森田・長南編訳　1980：380,380,285/73,73；791；68,67；337,509）より作表。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 捷解新語 | まいて | まいる | ふたつ |
| 마이뗴（ma’ittyəi） | 마이루（ma’iru） | 후다쭈（hutaccu） |
| 和語 | maitta（参つた） | Mairu（参る） | Futatçu（二つ） |
| Catta カッタ（勝つた） | Catçu カツ（勝つ） |  |
| 漢語 | Xŏguatシャゥグヮ*ッ*（正月） | － |
| Butjiブ*ッ*ジ（仏事）  | Butçujiブツジ（仏事） |
| Ippitイッピ*ッ*(一筆) | Qisatキサ*ッ*（貴札：書状の意) |

＊「10. 捷解新語のツの表記を考える」（～/Japanese/japanese1hp.docx）参照。

1. 『日本風土記』にみえる促音の表記法（濱田　昭和58：85-6）。

第一に、（改行）弧（節句）二ノ二五ウ　紫氣打（た）四ノ三オ（中略）第二の方法は（改行）密革（初）四ノ四ウ　効革（初）四ノ四ウ（中略）第三の方法は（改行）義壽效革（二十四日）四ノ五オ（原注10）　迎其打（）四ノ一八ウ」

＊第1の方法は入声韻尾を表記文字に取り込み、第2は入声韻尾を「子」「之」「世」などで表記、第3は入声韻尾を無表記したもの。

1. 平音：「語頭では無声で若干気息を伴うが，語中の有声音間では有声音となるもの，激音は有気音，濃音は閉鎖の開放の直前に声門の閉鎖ないし喉頭の緊張を伴うものである。」（福井　2013：35）。また「濃音は，韓国では「硬音」または「된소리」（筆者注：toin so li）とよばれるが、（略）」（同書：5）。

「例えば動名詞語尾-rq（筆者注：ㅭ）は，現代語と同様にその次にくる平音を濃音化する（下線は筆者）特徴をもっていたが，その濃音化をこの字を用いて表すのである。これは現代の音声学において，韓国語の特徴である濃音を発音するときに口腔の閉鎖の開放に先立って声門の閉鎖が観察でき，ゆえに濃音を[ʔk, ʔt, ʔp]と音声表記することが可能であるが，当時すでにこのような観察を行っていたということになる。（略）」（福井　2013：23）。

＊『東国正韻』の「決・斷」は「去」/「上」（kjujerʔ/toan；建國大學校出版部発行　1973：275,208。現代語では「결단」（kjertan；発音はkjerttan；福井　2013：80）。傍点は去と上で代用。はᄀ＋ᆑ＋ᇙの合字。はᄃ＋ᅶ＋ᆫの合字。

＊この平音の濃音化（「-rq t-＞-r tt-」（ㅭ ㄷ＞ㄹ ㄸ（lʔ t＞l ʔ t＞）；福井　2013：80））については「第9課　平音の濃音化」（羅聖淑　2008：33－6）。

＊「8.各自並書とㅭ（rʔ）との関係を考える」（～/korean/korean1hp.docx）。また「9.『捷解新語』の初声を重ねる注音法とは」（～/korean/korean3hp.docx）参照。

1. 「一こなたへませ。　こちおはせよ。こちへこよなどいふやうのに。こちへきやれ。又きられよなどゝいへるはつたなきこと葉かといへり又（以下、略）」(白木編著　昭和51：33)。

また平家物語には、「「コチ」は「アチ」と對比して用ゐられたる例を見る。（略）妻子集テ各アチトリコチトリ是ヲ見テ～（中略）「コチ」は「アチ」の下に重ね用ゐたる例あり。（略）只今落人ニテアチコチサマヨワム事ノ～（略）」（山田　昭和29：上巻192）。

1. 「99　一あちこちといふべきを　〇あつちこちなどつめていふはあしかるべし。（略）」（白木編著　昭和51：45)。
2. 「「よい正月でござる」Yexon guatz ongoçaro原注91と言って、（略）」/「「かたじけのうござる： Cataxiquinongozaru」/「「かたじけのうござる」 Cataxiquenongozar」/「Tabe marsuru（たべまるする、一〇五ページ）」（岩生・佐久間訳注　1965：91,316,346；土井補注　1965：660）。

土井氏の注には「アビラ・ヒロンがmarsuruと書いた語中のrは語尾のruと対照して、音節ruの略記と見るよりは、u母音が弱体化して、「まるする」から「まする」へうつる過程の一段階を示したものと解してよいのではなかろうか。」（土井補注　1965：661）とあります。
　また宣教師コリャードにも次のような記述がみられます（大塚訳　昭和9：6）。

「或る單語の中にtçがある時（これは非常に多い）。この字の發音の核心を攫むには、學習者は神に祈らねばならぬ。何となればこの音は極めて困難であり、かゝる音は他のどの國語に於ても見當らぬからである。と云ふ譯は、これはtçとs或ひはcが相半ばして發音されるばかりでなく、齒は舌にて強く打たれ、t及びçの各音は、tよりも寧ろçの方がより多く發せられるのがわかるやうに、發音されるのである。例へば。（略：改行）i又はuで終わる單語が日本人に依つて發音されるときには、最後の母音は初學者には殆んど聞き取れない。例へばuを聞く場合gozàrと聞こえ、を聞く場合に單にfitòtçの如く聞えるし、また、àxino fàraを聞いても單にàx no fàraと聞こえるのである。」。

＊この語尾の母音ウの無表記を宮島氏は母音の無声化とみられました（「母音の無声化はいつからあったか」；宮島　昭和36：38-48）が、それにたいする筆者の批判は「17.母音の無声化とみられたものは何か」（～/japanese/japanese1hp.docx参照）。

1. 「北岡明佳の錯視のページ」のなかの「多義図形・反転図形」（2022.2.6確認）（http://www.psy.ritsumei.ac.jp/~akitaoka/tagi.html）の「メールボックス」参照。
2. 濱田氏のように音韻論的に一つのTがtとtçuの2音であると考えれば解決不能な矛盾がでてきます。そこでその矛盾を解決するためにtとtçuが一音（同音）であると錯視の例を使って説明したのはもちろん説明の便宜からです。錯視は脳の機能と関係しているのですから、詰め字のTがtとtçuに錯視されることにもきちんとした説明が必要となるでしょう。そこで詰め字のTとは何か、上古の入声はtではなく、何だったのか、これが問題の本質です。
3. 本文のように「こそ」と「あち」を喉頭化音のkoʔsoとatʔi＝a***Q***tiと考えると、「あち」は喉頭化音であり、その後「あっち」と促音化するのにたいして、「こそ」は促音化しません。
　そこで促音化するとしないの違いを説明するために、喉頭化音のkoʔsoとatʔiにたいして、声門閉鎖音の消失とその促音化にたいして時間差を考え、先に声門閉鎖音が消失したために促音化しなかった「こそ」と声門閉鎖音が消失するまえに促音化して、その後「あっち」になった「あち」との違いを考えます。つまり「こち」はkotʔi（こち）→koti（こち）、「あち」はatʔi（あち）→a***Q***ti（あつち：***Q***は促音の先祖）→aQti（あっち）と考えます。しかし上のようなCʔ（喉頭化音）→***Q***→Q（促音）の変化は言語学の教科書にはみられず、言語学的にはこの変化は否定されるでしょう。
　そこで言語学的に否定される声門閉鎖音→促音の変化（第9節参照）を説明するためには何か特殊な理由を考えることが必要となるでしょう。
4. 「『切韻』を代表とする中古音は一九一五年のB.Karlgren（原注＊14）以来多くの研究者によって詳しく研究されており、現時点ではどの研究者の復元音も大同小異である。換言すればそれだけ信用できるということであり、中国の字音の変遷、そして日朝越の漢字音の変遷を考える場合も、『切韻』の復元音を定点として分析する方法が広く受け入れられている。」（古屋　2021：40）。

しかし、もし「大同小異で、信用できる」カールグレンの中古復元音が間違っていれば、そこから導きだされる上古再構音もまた間違ったものになるのは当然のことでしょう（注73/74参照）。

1. s-系/p-系複子音の例（福井　2013：38,54-5）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 種類 | 語形 | 意味 | 現代語（表記/音） |
| s-系 | sk- | skwəŋ | 「雉」 | 꿩（kkwəŋ/[kʔkwəŋ]） |
| st- | stʌｒ | 「娘」 | 딸（ttar/[tʔal]） |
| sp- | spam | 「頬」 | 뺨（ppjam/[ʔpjam]） |
| p-系 | pt- | ptɨt | 「意味」 | 뜻（ttɨs/[ʔtɨt]） |
| ps- | psʌｒ | 「米」 | 쌀（ssar/[ʔsal]） |
| pc- | pcak | 「対」 | 짝（ccak/[ʔtʃak]） |
| pth- | pthʌ- | 「弾く」 | 타-（tha-/[tha-]） |
| psk- | pskai | 「胡麻」 | 깨（kkai/[ʔkɛ]） |
| pst- | pstai | 「時」 | 때（ttai/[ʔtɛ]） |

＊「現代語（表記/音）」は筆者で上のように改めました。

「10. 合用並書表記を考える」（～/korean/korean1hp.docx）参照。

1. 本文で見・影母と渓・暁母の通用を説明するためにX→kʔ/kh の変化を想定しましたが、その変化を説明するためには中世朝鮮語のp-系複子音（本文：福井氏の命名）から現在の済州島方言（激音：th）と陸地方言（濃音：ʔt）への変化（分岐）が参考になります。そこで古代中国語にたいして、X→kh→x（暁母）とX→kʔ→k（見母）の変化を考え、これら二つの変化をみたす（軟口蓋音という制約を課して）、上古音Xを探しあてることが肝要です。そのためにはまだまだ工夫が必要です。
2. 「11模にア段が対応する例も上古音的である。後漢時代（一世紀）に伝来した金印の「漢の禾の奴（ナ？）の国王」、そして『三国志』魏志東夷伝倭人の条の「末盧」（マツラ？）など（筆者注：「模・奴・盧」は中古模韻mo/no/lo）。ただし、これらは日本の字音というより、当時の中国の音訳字音というべきもの。」（古屋　2021：54）。
3. 詰字T3に声門閉鎖音（喉頭化音cʔu）を考えているので、中国語入声***T***/T1/T2にも声門閉鎖音があったとみるのがよく、T2→ʔの変化を考えることができるでしょう。そこで倭人伝の「末」の入声韻尾も江戸時代のロドリゲスのTそのものではなく、Tの先祖***T***を考えれば、陳寿は日本語の「松」（ma***T***）を「末」（mua***T***）で写したと考えることができるでしょう。しかし「松」が「末」で音訳された理由は上のように考えるとしても、「松浦」の「浦」が「盧」（模韻lo）で音訳された不思議さも同時に問題になるでしょう。

＊「6．「松浦」はなぜ「末盧」と音訳されたのか」（～/japanese/japanese1hp.docx）参照。

1. 「上古音の声母について清朝～民国の学者が明らかにしたことはほぼ次のとおりである。
古無輕唇：非敷奉微（軽唇音）は幫滂並明と未分化。これは中古音（切韻）でも同様。
古無舌上：知徹澄娘（舌上音）は端透定泥と未分化。
娘日歸泥：娘日は泥母と未分化。
照二歸精：荘組は精組と未分化。
照三歸端：章組は端組と未分化。
喩三歸匣：云母は匣母と未分化。
喩四歸定：以母は定母と未分化。」（古屋　2010：16）。
2. 引用文の「古人」とは民国期の黄侃を含めた清朝の考証学者のこと。その本文の下線は清朝考証学者が到達した考えをカールグレンがローマ字化したことをさしますが、ここでは上古音再構をめざす‘新派’もカールグレンのローマ字をつけかえているだけという、筆者の思いに読みかえていただければ幸いです。

【以前の考察】（前々回更新分まで）

＊各節・各注などに関係する、以前のHP は次の通り。過去のホームページのURLの初めのhttp://ichhan.sakura.ne.jp/は省略してあります。

第3・27節：上代特殊仮名遣いについての考え

A.「 7.三たびハ行頭子音の変化について（問題1）（paline/paline4.html）

B.「3.動詞活用の問題を未解決にした大野説」/「4.エ列甲乙類音はどんな音だったのか」（ともに「母音融合にたいする大野説を考える」（special/oono.html）のなかで）

第4～11節：

A．中期朝鮮語の終声（入声）について：

「第6節　終声字を考える」（korean/korean1hp.docx）

B．中国語と朝鮮漢字音の入声について：

「8.中古音と朝鮮漢字音の入声について考える」（korean/korean2hp.docx）

C．中国語の入声について：

「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）

第6節：倭人伝の表記について：

「1.日本書紀歌謡次清音字の問題」（kaline/kaline1.html）

第7・8・11節：中国語の方言分化と呉音・漢音の関係について：

「中国語はいつから方言に分かれたのか」（cht/oninronhp.docx）

第10節：

A.「第8節　各自並書とㅭ（rʔ）との関係を考える」（korean1hp.docx）

B.「『捷解新語』における初声を重ねる注音法」（kaline/kaline2.html）

C.「17.促音便ってなに？」（rendaku/rendaku11.html）

第12～14 節：母音の無声化について：

「4.母音の無声化」（rendaku/rendaku20.html）

第15 節：破擦音化について：

「7.タ行の破擦化について」（rendaku/rendaku3.html）

第16 節：舌尖母音・中舌母音について：

A.「6.中舌母音を考える」/「7.宮古方言の中舌母音を考える」（special/oono.html）

B.「5.口蓋化と摩擦噪音について」（kaline/kaline1.html）

第18節：「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）

第26節：四ツ仮名について：

A.「9.四ツ仮名について」（rendaku/rendaku4.html）

B.「四つ仮名の混乱」（rendaku/rendaku21.html）

注2：日本語とハワイ語における英語からの借入語の関係について：

「17．促音便ってなに？」のなかの「母音添加」（rendaku/rendaku11.html#boin-tenka）

注8：古代助詞イ、またイ・シの相関について：

「F.日本語とオーストロネシア語族にみられるイ・シの相関について」（paline/paline12.html）

注28：「6.謡曲におけるツの発音について」（korean/korean3hp.docxの第6節）

注30：喉頭化（母）音について：

A.「9.ハ行転呼音になぜ喉頭化母音はあらわれたのか(問題2)」（paline/paline6.html）

B.「10.古代日本語のどんなところに喉頭化母音がみられたのか(問題2）」（paline/paline7.html）

C. 「29.サ行イ音便の問題」（rendaku/rendaku22.html）

D.「4.琉球方言にみられる無気喉頭化音について」（kaline/kaline2.html）

注29～31：声門閉鎖音と促音の関係について：

A.「(41) （声門閉鎖音）→Q（促音）の変化について(新しい考え　2011.12.5)」（paline/paline14.html#41）

B.「ʔ→Qの変化にたいする批判」（korean/korean2hp.docxの注10）

注32：中古舌内入声をtʔと考えるとしても、なお残る疑問について：

「中古中国語の舌内入声を考える」（korean/korean3hp.docx）の注23

注59：「はっきりした声立て」と「ゆるやかな声立て」について：

A.「8.中古音と朝鮮漢字音の入声について考える」（korean/korean2hp.docx）

B.「5.初声喉音字を考える」（korean/korean1hp.docx）

注62：「まる1する2」の「る1」の消失と喉頭化音の発生について：

「9.ハ行転呼音になぜ喉頭化母音はあらわれたのか(問題2）」（paline/paline6.html）

注66・70：サ行音の変化について：

A.「6.サ行の直音化について」/「8.ツァ行音について」（rendaku/rendaku3.html）

B.「10.すずめはスズと鳴いたか？」（rendaku/rendaku5.html）

C.「サ行イ音便の消長」（rendaku/rendaku11.html）

D.「29.サ行イ音便の問題」（rendaku/rendaku22.html）

E.「須須」と鳴いた雀はいま」（saline/saline1.html）のなかの「5．稲荷山鉄剣銘のサ音を考える」

F.「5.サ行音の問題を考える」（special/oono.html）

注78：「ウ（イ）音便と促音便・撥音便の交替」：

A.「17.促音便ってなに？（rendaku/rendaku11.html）

B.「18.特殊ウ音便と撥音便・促音便の交替はなぜ起こったのか」（rendaku/rendaku12.html）

C.「5.促音化現象について考える」（kaline/kaline2.html）

【引用書など】

＊中国・韓国人名は日本語読み。

＊複製本や再版本がある場合も初版の注記（書名・出版年・版次など）はほとんど省略。

愛知大学中日大辞典編纂処編　1968　『中日大辞典』　中日大辞典刊行会（発行）　燎原（発売）　＊6刷（1980）

有坂秀世　昭和32　『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂　＊5版（昭和44）

飯田利行　1990　『日本に残存せる中国近世音の研究』　名著出版

＊『日本に殘存せる中國近世音の研究』（駒澤大學中國文學研究室内飯田博士著書刊行會発行　昭和30年刊）の復刊

岩生・佐久間訳注　1965　『アビラ・ヒロン　日本王国記/ルイス・フロイス　日欧文化比較』（大航海時代叢書　Ⅺ）　アビラ・ヒロン/ルイス・フロイス　佐久間正訳注・会田由訳・岩生成一注/岡田章雄訳注　岩波書店

岩倉市郎　昭和16　『喜界島方言集』（全国方言集　1）　柳田國男編　中央公論社

岩淵悦太郎　昭和52　『国語史論集』　筑摩書房

上野和昭編　平成28　『補忘記貞享版元禄版影印ならびに声点付漢字索引　影印篇』（アクセント史資料索引　21（1）　アクセント史資料研究会発行

幸雄　昭57　「解題」『宮良當壯全集　9　琉球諸島語の国語学的研究』　宮良當壯　第一書房

大島正二　1998（増訂版）　『中国言語学史　増訂版』　汲古書院

大塚高信訳　昭和9　『コイヤード　日本語文典』　Diadaco Collado著　坂口書店（発行）

＊『Ars Grammaticae Iaponicae Lingvae』（ローマ刊　1632年）

大山公淳　昭和53　『大山公淳著作集　4』　大山博士著作集刊行会編　（株）ピタカ

小川環樹　昭和52　『中国語學研究』（東洋学叢書）　創文社

尾崎雄二郎　昭和55　『中國語音韻史の研究』（東洋學叢書）　創文社

亀井孝　昭和59　『亀井孝論文集　3　日本語のすがたとこころ（一）音韻』　吉川弘文館

　1993　『ハングルの成立と歴史　訓民正音はどう創られたか』　梅田博之（日本語版協力）　大修館書店

京大国語国文研編　昭和36　『全　浙兵制考日本風土記』（本文、解題、國語・漢字索引）　侯継高撰　京都大学文学部国語学国文学研究室編　京都大学国文学会

京大國語國文研編　昭和47　『三本對照　捷解新語　本文篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

京大國語國文研編　昭和48　『三本對照　捷解新語　釋文・索引・解題篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

金東昭　2003　『韓国語変遷史』　栗田英二訳　明石書店

建國大學校出版部（発行）　1973　『東國正韻　全　解題附』　建國大學校圖書館（所蔵）　＊全6巻影印本

河野六郎　1968　『朝鮮漢字音の研究』　私刊

古典研究會出版　昭和55　『法華經音義三種（古辭書音義集成　5）　築島裕（解題）　白藤禮幸・沖森卓也（索引）　汲古書院（発行）

小林芳規　昭和44.12　「中世」『國文學　解釋と鑑賞』（第34巻14号）　至文堂

小松英雄　1956.7　「日本字音における唇内入声韻尾の促音化と舌内入声音への合流過程―中世博士家訓点資料からの跡付け」『国語学』（25緝）　国語学会編　国語学会

小松英雄　昭和56　『日本語の世界　7　日本語の音韻』　中央公論社

坂名井深三　昭和54　『稲荷山古墳　鉄剣銘百十五文字の謎　鉄剣の主は聖徳太子の義兄』櫂書房

崎山理　1978　「3　南方諸語との系統的関係」『岩波講座　日本語12　日本語の系統と歴史』　岩波書店

佐藤昭　2002　『中国語語音史―中古音から現代音まで』　白帝社

柴田武　1988　『方言論』　平凡社

志村良治　昭和42　「5　中古漢語の語法と語彙」『中国文化叢書　1　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

佰太郎　1977　「4　現代日本語の音韻」『岩波講座　日本語5　音韻』　岩波書店

白木進編著　昭和51　『かたこと』（笠間選書53）　笠間書院

　＊『かたこと』（安原貞室著1650年刊）の注釈書

城田俊　1995　『日本語の―音声学と音韻論―』（言語学テキスト叢書　3）　ひつじ書房

杉本達夫・牧田英二・古屋昭弘共編　2013　『デイリーコンサイス中日・日中辞典（第3版）』　三省堂

＊デイリーコンサイス中日辞典とデイリーコンサイス日中辞典の合冊

大東文化大学中国語大辞典編纂室編　平成7（再版）　『中国語大辞典　第二冊』（中日辞典の部）　角川書店

高山倫明　2012　『日本語音韻史の研究』（ひつじ研究叢書〈言語編〉97巻）　ひつじ書房

中国語学研究会編　昭和45（再版訂正）　『中国語学新辞典』　光生館　＊初版（昭和44）趙義成訳注　2010　『訓民正音』（東洋文庫）　平凡社

陳彭年等（重修）　民国80　『校正宋本廣韻附索引』　藝文印書館校正　藝文印書館印行

寺師忠夫　1985　『奄美方言、その音韻と文法』　根元書房

和漢三才圖會刊行委員会編集　昭和45　『和漢三才圖會（上）』　寺島良安編者　東京美術

天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55（改定版）　『現代朝鮮語辞典　改定』　養徳社　＊初版（昭和42）

土井忠生訳註　昭和30　『日本大文典』　ジョアン・ロドリゲス著　三省堂出版

　＊『Arte da lingoa de Japam』（P.João Rodriguez著 長崎学林刊 1604-8年）

土井忠生補注　1965　「アビラ・ヒロンとフロイスの日本語」『アビラ・ヒロン　日本王国記/ルイス・フロイス　日欧文化比較』（大航海時代叢書　Ⅺ）　アビラ・ヒロン/ルイス・フロイス　佐久間正訳注・会田由訳・岩生成一注/岡田章雄訳・注　岩波書店　＊2次（1973）

土井忠生・森田武・実編訳　1980　『邦訳日葡辞書』　岩波書店

東京大學國語研究室編　昭和63　『下學集　三種』（東京大學　國語研究室資料叢書　14』　汲古書院

　＊天文23年版・永禄2年版・黒川本の影印

藤堂明保　昭和42　「Ⅱ　音韻論　1　上古漢語の音韻」『中国文化叢書　1　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

藤堂明保・小林博　昭和46　『音注 韻鏡校本』　木耳社

藤堂明保編　昭和53　『学研　漢和大字典』　学習研究社

藤堂明保　1980　『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館

　＊江南書院（昭和32年刊）の改版

外山映二　昭和47　「第三章　近代の音韻」『講座国語史　2　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店　＊6版（昭和57）

中田祝夫・小林祥次郎　昭和48　『書言字考節用集研究並びに索引』　風間書房

＊影印篇 (原本: 享保二年版 国立国会図書館岡田文庫蔵　題簽の書名: 増補合類大節用集)

中田祝夫・根上剛士　昭和46　『中世古辞書四種研究並びに総合索引　影印編』　風間書房　昭和46

中田祝夫・根上剛士　昭和46　『中世古辞書四種研究並びに総合索引　索引編』　風間書房　昭和46

中本正智　1976　『琉球方言音韻の研究』　法政大学出版局

直哉　昭和62　「重箱読み・湯桶読み」『漢字講座　3　漢字と日本語』　佐藤喜代治編　明治書院

日本大辞典刊行会編　昭和48/48/49/50/51　『日本国語大辞典』（第5・6・9・17・19巻）　小学館

沼本克明　1974.12　「日本漢字音に於ける唇内入声字の促音化とフ入声」『国語学』（99緝）　国語学会編　国語学会

沼本克明　2005　「第8章　漢字音と日本語　b.漢音系字音」『朝倉日本語講座2　文字・書記』　林史典編　北原保雄監修　朝倉書店

野原将揮　2016　「戦国出土資料と上古中国語声母研究」（博士学位論文：早大学位記番号新7304）

＊早稲田大学リポジトリ（http://hdl.handle.net/2065/00051853）より引用（2022.2.7確認）

橋本進吉　1950　『橋本進吉博士著作集　4　國語音韻の研究』　同刊行会編　岩波書店　＊20刷（1976）

橋本進吉　昭和36　『橋本進吉博士著作集　11　キリシタン敎義の研究』　同刊行会編　岩波書店

＊國字音譯文禄元年天草版吉利支丹教義（ドチリイナキリシタン：1592年天草耶蘇會學林刊行）

橋本萬太郎　1981　『現代博言学　言語研究の最前線』　大修館書店

服部四郎　1951（旧版）『音声學』（岩波全書）　岩波書店

　＊1984年（新版：録音カセットテープ附属：未見）

濱田敦 1950a　「促音と撥音（上）」『人文研究』（大阪市立大学紀要（1巻1号）　大阪市立大学

濱田敦　昭和58　『續朝鮮資料による日本語研究』　臨川書店

浜田敦・佐竹昭広編　昭和46　『塵添壒嚢鈔・壒嚢鈔　全一冊』　臨川書店　＊初判（昭和43）

平山久雄　昭和42　「Ⅱ　音韻論　3　中古漢語の音韻」『中国文化叢書　1　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

福井玲　2013　『韓国語音韻史の探究』　三省堂

　＊한국어 음운사 탐구　Explorations in Korean Historical Phonology

藤原浩史　昭和63　「付録1　唐音一覧（呉音・漢音対照）」『漢字講座6　中世の漢字とことば』　佐藤喜代治編　明治書院

古屋昭弘　2010.11　「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」『中国語学』（257号抜刷）　日本中国語学会

古屋昭弘　2021　「02　字音の変遷について」『漢字を使った文化はどう広がっていたのか　東アジアの漢字漢文文化圏』（東アジア文化講座　2）　金文京編　（株）文学通信

三浦　昭和50　『音曲玉淵集』　濱田敦編並開題者　臨川書店

＊『音曲玉淵集』（三浦著　享保12年板本）の影印。

三木幸信・福永静哉　昭和41　『国語学史』　風間書房

水谷真成　昭和42　「Ⅱ　音韻論　2　上中古の間における音韻史上の諸問題」『中国文化叢書　1 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店　＊7版（平成3）

宮島達夫　昭和36.6　「母音の無声化はいつからあったか」『国語学』（第45輯）　国語学会

宮良當壯　昭和56　『宮良當壯全集　8　八重山語彙乙篇』　第一書房

無著道忠　明治42（初版）　『禪林象器箋』　村田無道校字　貝葉書院　＊復刻版（誠信書房1963は未見）

＊国会図書館デジタルコレクションinfo:ndljp/pid/823268（初版）より引用（2022.2.5確認）。

森博達　昭和60　「5　「倭人伝」の地名と人名」『日本の古代　1　倭人の登場』　森浩一編　中央公論社

森博達　昭和63　「3　日本語と中国語の交流　2　古代の文章と『日本書記』の成書過程」『日本の古代　14　ことばと文字』　岸俊男編　中央公論社

森博達　『古代の音韻と日本書紀の成立』　大修館書店　1991

森田武　昭和48　「捷解新語解題　五、成立の時期」『三本對照　捷解新語　釋文・索引・解題篇』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學會

森田武　昭和51　『天草版平家物語難語句解の研究』　清文堂出版

山田孝雄　昭和29　『平家物語の語法　上・下』　寶文館

山田孝雄　昭和33（訂正版）　『國語の中に於ける漢語の研究』　宝文館出版

吉澤義則　昭和6　『国語説鈴』　立命館出版部

羅聖淑　2008（第2版初版）　『韓国語　発音と文法－第2版－』　白帝社

李基文　1975　『韓国語の歴史』　藤本幸夫訳　村山七郎監修　大修館書店